

第九章:[調査③]JOCV 海外教育経験教員の取組事例 —JOCV 海外教育経験教員対象・インタビュー調査—

佐藤真久
(東京都市大学)

1.はじめに

インタビュー調査の実施においては、事前に、「インタビュー調査ガイドライン・調査記入フォーマット」(付録(4)参照)を作成し、インタビュー調査の質と一貫性の確保に努めた。インタビュー調査([調査③])は、アンケート調査([調査②-1]・[調査②-2])と深い整合性を保ちつつ、経験教員の海外ボランティア活動への参加動機から、制度認識、派遣中・派遣後の還元・貢献活動というように、時系列でインタビューを行うことを通して、各段階の取組の背景にある状況や心情の変化、悩みや葛藤についての意見を聞きだすことに努めた。さらに、海外教育経験を通じた経験教員自身の変化についても、インタビューを行い、アンケート調査では入手できない詳細な情報の獲得に努めた。

その一方で、本調査研究では、「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後に好事例となり得る還元・貢献活動を行っている経験教員を主に選び、所属学校等において詳細なインタビュー調査を行った。なお、一部のインタビュー対象者には、「現職教員特別参加制度」が出来る以前の派遣教員や一般隊員として経験後に教員になった方の例もある。いずれのインタビュー調査においても、様々な成功事例とその貢献要因を把握することが可能であった。しかしながら、経験教員が帰国後に十分に還元・貢献活動ができていないとの指摘も多く耳にする。今後の調査研究においては、好事例となり得る還元・貢献活動に焦点をおくだけでなく、経験教員の還元・貢献活動における失敗例や阻害要因についても把握も重要である。

2. インタビュー調査[調査③]実施概要

「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後に好事例となり得る還元・貢献活動を行っている経験教員を主に選び、所属学校等において詳細なインタビュー調査(2-3時間程度)を実施した(調査実施期間:2009年11月-2010年1月,調査対象:20名)。調査対象は、経験教員対象のアンケート調査([調査②-2])結果、経験教員所属学校長対象のアンケート調査([調査②-1])結果と、関係機関(JICAや文部科学省)の既存情報に基づき選定をした。さらに、調査対象の選考にあたっては、還元・貢献活動の活動形態(開発教育プログラムの実施や教科教育、学級運営、授業外活動、キャリア指導、外国人児童生徒への対応、帰国隊員ネットワーク、ボランティア活動など)や指導教科、指導対象段階、などにおいて多様になるよう配慮をした。[調査③]の調査概要は以下を参照(表9-1,表9-2,表9-3)。

【表 9-1: [調査③] 経験教員に対するインタビュー調査の概要】

■ 調査目的:	「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後の還元・貢献活動において展開されている取組事例とその背景・展望について、把握することを目的としている。
■ 調査対象:	経験教員 20 名
■ 調査方法:	インタビュー調査
■ 調査構成:	(1) 参加動機, (2) 制度認識と対応, (3) 派遣中の活動内容と還元・貢献活動, (4) 派遣による自身の変化, (5) 派遣後の還元・貢献活動 (学校における授業内外の取組事例, 学校外との取組事例), (6) 還元・貢献活動の阻害・貢献要因, (7) 提案
■ 調査実施時期:	2009 年 11 月 - 2010 年 1 月
■ 調査実施結果:	経験教員 20 名

【表 9-2: インタビュー調査 [調査③] プロセス】

■ インタビュー調査の実施プロセス
● 時間: 2 時間 ~ 3 時間
● インタビュー調査方法: 半構造化インタビュー
● インタビュー調査同席者: インタビュー対象者 (派遣教員), 国際協力機構, 東京都大学関係者
● 方針・本調査の位置づけ: (1) 本調査は, 事前に実施したアンケート調査の補足調査として行い, インタビュー対象者の派遣前, 派遣中, 帰国後の活動において特筆すべき点について時間をかけて詳細を聞きとる方針をとった。(2) 最終的には, インタビュー調査記入フォーマットに論点を整理。インタビュー調査記入フォーマットへの記載においては, JICA や当人から受け取る関連資料・データも参考にした。

【表 9-3: インタビュー調査 [調査③] の内容 (非構造化インタビュー)】

■ インタビュー調査 (活動前・活動中)
● 参加動機: [質問例] 青年海外協力隊に参加した動機は何ですか? 具体的に述べてください。
● 制度認識と対応: [質問例] 「現職教員特別参加制度」についてどのように知りましたか? 職場 (校長や同僚) の対応はいかがでしたか?
● 活動内容: [質問例] 派遣先での大まかな活動内容を教えてください。
● 派遣教員自身の変化: (1) [質問例] 活動を通じてご自身の変化はありましたか? 具体的に述べてください。(2) [質問例] 現職教員派遣はどのような点で有意義だと思いますか? (3) [質問例] 教育現場にとってよかったといえる点はなんですか? 具体的に述べてください。
● 派遣活動中の還元・貢献効果: [質問例] 現地での活動中, 日本国内の学校等との交流はありましたか? 具体的に述べてください。
■ インタビュー調査 (活動後の還元・貢献効果)
● 学校 (授業): [質問例] 学校 (授業) における活動事例を具体的に紹介してください。
● 学校 (授業以外): [質問例] 学校 (授業以外) における活動事例を具体的に紹介してください。
● 学校外: [質問例] 学校外における活動事例を具体的に紹介してください。
● その他: [質問例] その他の活動事例を具体的に紹介してください。
● 阻害要因: [質問例] 帰国後の活動を行うにあたり, 何が阻害要因になっていますか? 具体的に指摘してください。
● 貢献要因: [質問例] 帰国後の活動を行うにあたり, 何が貢献要因になっていますか? 具体的に指摘してください。
■ インタビュー調査 (提案・要望)
● 提案・要望: [質問例] 先生の経験を今後活かしていくためには, どのような提案・要望がありますか? 具体的に述べてください。



写真:インタビュー調査風景
(K.M.教諭－横須賀総合高校)



写真:インタビュー調査風景
(K.I.教諭－沼津市立大沢小学校)

3. インタビュー調査[調査③]結果

※【表 9-5】－【表 9-24】を参照

4. インタビュー調査[調査③]考察

表 9-1～表 9-3 に示したように、「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後の還元・貢献活動において展開されている取組事例とその背景・展望について、把握することを目的として、(1)参加動機、(2)制度認識と対応、(3)派遣中の活動内容と還元・貢献活動、(4)派遣による自身の変化、(5)派遣中・派遣後の還元・貢献活動(学校における授業内外の取組事例、学校外との取組事例)、(6)還元・貢献活動の阻害・貢献要因、(7)提案、の7つのテーマを中心にインタビューを行った。

ここでは、以下の表に示したような経験隊員 20 名のインタビュー調査結果から得られた、派遣中・派遣後の還元・貢献活動事例やその背景、今後の展望などについて全体的な考察を行うこととする。

20 名のそれぞれの派遣中・派遣後の還元・貢献活動事例等、上記の7項目に関する調査結果は、本章末表 9-5 から表 9-24 に付す。それらが示しているように、実に多種多様な取組がさまざまな場面で、臨機応変に展開されるとともに、派遣経験が JOCV にとって特定の文脈のみでなく、人間力とでもいべき全体的、総合的な資質の向上をもたらしていることがわかる。また、今後の展開に向けて、どのような要因を尊重すべきなのか、どのような点を改善改革すべきなのか、JOCV の全体的な傾向が明確になってきたと言える。

今後 JOCV の還元・貢献の取組を教育現場においてさらに発展させるべく、これらを、「海外ボランティアに参加することによる教員自身の変化」、「制度の推進にむけた阻害要因」、「制度の推進にむけた貢献要因」として、その全体的な傾向を考察する。

4.1. 海外ボランティアに参加することによる教員自身の変化(インタビュー調査に基づく)

派遣経験によって得られた教員自身の変化として、全体的に示された傾向は、コミュニケーション能力の向上、問題への対処能力の向上、概念化能力の向上、日本の教育の再認識、異文化理解の向上、そして、忍耐力や理解力の向上、信頼関係の構築など人間関係力といった全体的、総合的な人間力とでもいべき資質の向上が見られる。これらは教員自身によって認識されており、コミュニケーション能力の向上がわかりやすい授業の実施に、問題への対処能力の向上が学校運営等における諸問題への適切な対応に、概念化能力の向上が問題解決的な学習活動の実践に、日本の教育の再認識が日本の教育の質の向上に、異文化理解の向上が「内なる国際化」の実現に、それぞれ活かされていることがわかる。

また、その他忍耐力や理解力の向上、信頼関係の構築など人間関係力といった全体的、総合的な資質の向上は、特定の機会ではなく全体的な文脈のなかで活かされている。

これらのことから、還元・貢献のあり方には、教科教育や開発教育における講師など特定の場面のみでなく、教科横断的な取組や学年、学校行事、学外活動などさまざまな場面で多様なあり方があって、それらは教員の表現次第でどのような形にも表現されうるものだと言えらる。また異文化体験によって得たものを、直接的に還元する場合もあれば、間接的に還元する場合もあり、かつ JOCV 教員の資質や人間的な魅力が向上することで、異文化体験に依らないメッセージであっても、子どもたちによりリアリティとインパクトを持って伝えることができる。

4.2. 制度の推進にむけた阻害要因(インタビュー調査に基づく)

制度推進に向けての阻害要因は、日常の業務に加え、学校行事や部活の指導などで時間的な余裕がないという点が全体的な傾向としてあげられる。さらに、既存のカリキュラムの中では国際理解教育などを行うには限度があることに加えて、派遣経験のある隊員が、関係する場に配置されることが少ない現状が、還元・貢献の促進を阻んでいると考えられる。まず、JOCV がどのような還元・貢献ができるのか、そしてどのような JOCV がどこにいるのかといった全体的な JOCV に関する情報が体系だって把握されておらず、それらを活かそうとする方針や仕組みも制度もないということが指摘される。

こうした現状に対し、アンケート調査でも示されたように、インタビューからも、今後還元・貢献活動の推進にあたり、JICA や文部科学省等の支援に対する希望する声も多くきかれる。文部科学省に対する希望としては、帰国隊員の経験を活かせるような組織や立場に配置するような人事の仕組み、外国人児童生徒学習支援の事業などの他、教科や領域として「国際」または「国際協力」の新設などである。また、JICA に対しては、行政とのパイプ役、及び予算面の支援、各都道府県でのネットワーク作りや報告会・ワークショップなどの開催、そして教育委員会に対しては、開発教育についての研修の場など能力向上の機会を設けるとともに、そのような機会に参加しやすい体制づくりを求めている。また、文部科学省と JICA の連携による強いリーダーシップに対する期待が大きい。制度面では、派遣前には「適切な広報」や「制度に対する管理職・同僚の理解」。派遣中にはテレビ会議、スムーズなインターネット授業の支援などのための設備支援への希望。派遣後には「資源ネットワークと知見共有」、「還元・貢献活動の活用と機会づくり」、「知見蓄積」、「経験教員の招聘機会と財政支援」などが希望として挙げられた。

4.3. 制度の推進にむけた貢献要因(インタビュー調査に基づく)

ほとんどの隊員が、協力隊に参加したことが自身の教育現場での授業実践やその他のさまざまな活動において貢献要因となっていると認識している。問題解決能力向上につながったと答え、「客観的な見方」や「今までの考えにとらわれず、広い視野で取り組むことができるようになった」といった認識面での向上や、教科指導の中で具体的に学力を向上させる方法を試行錯誤した事による教育課程指導力、教材・教具・カリキュラムの開発、問題解決能力、ハプニングに対する迅速な対応などの危機管理能力、相手に理解してもらうためのプレゼンテーションの工夫などの自己表現力、ニーズ・課題発見能力などが技術面での向上点としてあげられた。

また、多様な価値観を尊重できるようになったといった態度面での向上、行動力、企画・運営能力、周辺動員力、連携・協力、学外活用・地域連携といった行動面が自身の能力向上として挙げられた。特に、行動面として挙げられた能力向上は、自らよく考え、周囲の人々との相互理解を促進し、信頼関係を築くことを基礎とした体制や仕組みづくりを構築していくコーディネート力などを示している。

【表 9-4:JOCV 海外教育経験教員の取組事例(関連キーワード一覧)】

経験教員と属性	還元・貢献活動キーワード／教育実践キーワード
<p>K.M.教諭 (制度以前) ブータン:H12-1 体育教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:派遣中の壁新聞・手紙・写真による情報発信・コミュニケーション,派遣後の国際理解教育/開発教育プログラム,文化祭での展示,教科教育(保健),人権教育 教育実践キーワード:コミュニケーションの質的变化(相手の表情を見ながらのコミュニケーション),「常識」概念の変化,「豊かさ」概念の変化
<p>K.I. 教諭 (制度利用) ホンジュラス:H14-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:在留外国人児童生徒・保護者対応,国際理解教育/開発教育,西語・英語を活用した週末学習支援,ペルー大使館・教育省との連携による算数教材開発,FMぬまづ初の教育番組の企画(西和2ヶ国語) 教育実践キーワード:コミュニケーションの質的变化,「常識」概念の変化,安全・危機管理能力の向上,マイノリティの経験を生かした生徒指導,地域における多文化協働,防災教育,特別支援
<p>N.N. 教諭 (制度利用) ドミニカ:H16-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:生徒指導,キャリア教育,学校行事(バザー),寄付活動,後輩教員(隊員派遣)連携による国際理解教育/開発教育 教育実践キーワード:経験に基づく言葉の説得力,放任主義(教育的意味を有した),広い視野と動じない態度,児童生徒の個別指導
<p>H.K. 教諭 (制度利用) ウガンダ:H19-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:派遣中の参加型学年通信,近隣小学校との連携による国際理解教育/開発教育,起業家教育,PTA・地域住民を巻き込んだバザーの開催とフェアトレード 教育実践キーワード:「異文化理解」概念の変化(価値の押しつけから認識・受容へ),日本の教育力の高さ,派遣前の還元・貢献の可能性,日本での近隣小学校との連携による教育実践
<p>H.S. 教諭 (制度利用) ベトナム:H15-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:国際理解教育/開発教育,総合的学習の時間,学級運営,経験を応用したボリビアとの連携プログラム,教育委員会や同僚教員との連携した国際教育プログラム 教育実践キーワード:教育観の変化(伝える・教えるから繋がる・引き出すへ),価値観の尊重,直接指導から間接指導へ,日本の積み重ね学習の強み,「言葉の力」の再認識,「表現できる子」を育てる,子ども同士の対話能力,マイノリティ経験を生かした学級運営
<p>K.O. 教諭 (制度利用) フィリピン:H19-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:総合的学習の時間,外国語教育,国際理解教育/開発教育,紙芝居を活用した国際理解教育 教育実践キーワード:日本の教育教材の質の高さ,教材の質的改善,授業改善(要点整理と明確な伝達,丁寧な授業運営),同僚との連携による教育実践,コミュニケーション能力の向上,メンタリティの向上
<p>N.T. 教諭 (派遣後教員へ) ジンバブエ:H9-1 派遣後に教員へ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:水の大切さを伝える環境教育実践,募金活動,生徒指導,学級運営 教育実践キーワード:万国共通の子どもたちの笑顔,日本の常識・世界の非常識,コミュニケーション手段としての英語,安全管理・危機管理能力の向上,チャレンジ精神,現実と理想を教える役割(教育者果たす役割の認識変化),マイノリティ経験を通じた外国籍児童生徒への配慮,子ども達との信頼の構築
<p>Y.Y. 教諭 (制度以前) タンザニア:H12-2 理数科教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:派遣中教育関係員どうしの学び合い(タンザニア教育研究会),活動情報の発信,国際理解教育/開発教育,総合的学習の時間,道徳教育,ICT活用の国際教育,関東教育支援ネットワーク 教育実践キーワード:行動力の向上,地球人としての世界観の醸成,ICT活用がもたらす国際理解,経験隊員のネットワーク構築と教育実践研究
<p>N.T. 教諭 (派遣後教員へ) ジンバブエ:H13-1 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:食育,給食指導,保護者参加型の授業実践,総合的学習の時間,学級間の交換授業 教育実践キーワード:児童生徒の個々に向き合う指導の重要性,一日一日の時間の大切さ,日々の教育活動に対する振り返りの重要性,授業の内容の融通性の向上
<p>K.H.教諭 (制度利用) ルーマニア:H15-1 ソーシャルワーカー</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:国際理解教育/開発教育,保健所とのボランティア活動(大東市たばこゼロプロジェクト),社会教育活動(ルーマニアからのほほえみ),日常会話,総合的学習の時間 教育実践キーワード:仲間意識の醸成,日本の教育制度の素晴らしさ(教育機会),経験に基づく言葉の重さ,生きる力,「あたりまえ」の概念,あいさつと日常会話の重要性,学び合い,総合力を持った教員の育成,地域連携のプロデュース

【表 9-4:JOCV 海外教育経験教員の取組事例(関連キーワード一覧)(つづき)】

経験教員と属性	還元・貢献活動キーワード/教育実践キーワード
<p>K.M. 教頭 (制度以前) ホンジュラス:H63-3 技術科教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:教科教育(技術),ふるさと学習,自然体験を通じた感動体験,ICTを活用した国際理解・開発教育,「幸せ」に関する道德教育,教育指導力向上研究会,教育支援ネットワーク,学校運営,JOCV グリーティングカードから始める JOCV 派遣教員と地元学校との交流プログラム 教育実践キーワード:ふるさと教育,教育の国際化,「豊かさ」の概念,生きる力,日本の子どもが世界の子とも繋がる意味,感動体験,自分で気づく力を養う
<p>J.K. 教諭 (派遣後教員へ) ベトナム:H12-2 SE</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:派遣中における日本の高校との連携による国際理解教育/開発教育(Meet the GLOBE プロジェクト),総合的学習の時間,人権教育(バリアフリー,私たちの幸せ),NGO 連携の教材支援活動,持続発展教育(ESD) 教育実践キーワード:人のつながりの大切さ,人権教育・国際教育を通じた価値教育,既存の教育実践との関連づけ(つながり・かかわり・ふかまり・ひろがり),「幸せ」の概念
<p>M.S. 教諭 (制度利用) ドミニカ共和国: H18-1 小学校教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:外国語教育,国際理解教育,北京師範大学実験小学校との連携プログラム 教育実践キーワード:コミュニケーション手段としての英語,日本語教育の重要性,日本文化の尊重,世界に対する好奇心の醸成
<p>N.I. 教諭 (制度以前) ジンバブエ:H6-2 体育教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:生徒指導,道德,不登校児童生徒対応,保健での衛生・健康指導,部活動指導,京都府連携による普及啓発 教育実践キーワード:「豊かさ」,「幸せ」の価値観,家庭や社会が育てる子どもたち,不登校児童生徒への「生き方」指導,心のゆとり,日常会話,経験・挑戦の大切さ,良いことを伝える大切さ
<p>K.F.教諭 (派遣後教員へ) ジブティ:H12-2 陸上競技</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:バランス感覚を重視した生徒指導,日々の教育実践への直接的・間接的な経験の織り込み,陸上部指導 教育実践キーワード:コミュニケーション力の幅の拡大,志の大切さ,言葉の大切さ,新しい視点を生み出す手段としての外国語,経験の活かし方の匙加減,バランス感覚,体当たりの指導,問題解決に向けた臨機応変な対応,異文化対応
<p>H.U. 教諭 (制度利用) ミクロネシア:H18-1 幼児教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:国旗かるたや国旗の絵本を生かした国際理解教育,歌を通し様々な世界の言葉との出会い 教育実践キーワード:総合プロデュース力,コーディネート力,家族の大切さ,おおらかさ,マイノリティ経験を生かした外国籍児童・保護者対応,身近ところからグローバルな世界観を
<p>H.O. 教諭 (制度利用) マラウイ:H6-1 理数科教師 パキスタン:H18-2 (SV)理科教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:「マラウイだより」,「ラホールだより」の送付,道德教育,ALT との連携授業,生徒指導,出前授業,学級通信,人権学習,国際理解教育,理科の実験公開授業 教育実践キーワード:命の大切さ,自然との接点,人権学習,生物教材の収集と研究,ルールの根拠と自己選択,実験教材・教具の開発
<p>Y.K. 教諭 (派遣後教員へ) ハンガリー:H13-2 日本語教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:日本語関連研究会合での報告・交流(派遣中),日本語指導,比較エッセイ 教育実践キーワード:日本語習得プロセスの体験に基づく日本での指導の幅の向上,日本語の面白さ,多様な言語習得に基づく独自の教授法の改善,「外からみた日本語」
<p>A.N. 教諭 (制度利用) ベトナム:H17-1 青少年活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:「ベトナム通信」,ホイアンの祭りでの折り紙の共同壁画制作,国際理解教育/開発教育,平和教育,共同壁画制作と国際交流,英語教育 教育実践キーワード:日本の常識・世界の非常識,教師が身につける生きる力,図工・美術教育を通じた道德活動(もしも魔法がつかえたら)
<p>A.O. 教諭 (制度利用) パラグアイ:H15-1 音楽教師</p>	<ul style="list-style-type: none"> 還元・貢献活動キーワード:生徒への手紙(壁新聞),生徒どうしの文通活動,総合的学習の時間を活用した音楽祭「南北スペシャル」,道德の授業,平和を願うミュージカルの脚本づくり,外国語教育,アルパの演奏と国際理解教育 教育実践キーワード:多様な価値観の尊重,日本の教育指導方法のレベルの高さ,経験の重さと自信,世界と日本のつながり・かかわり,自己表現の大切さ

JOCV 海外教育経験教員の取組事例 インタビュー調査[調査③]結果



【表(見開きページ)の内容】

<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 経験教員: ■ 派遣国: ■ 職種: ■ 還元・貢献活動 キーワード: ■ 教育実践 キーワード: ■ 備考: 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;">派遣中のボランティア活動</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;">派遣中のボランティア活動</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px;">派遣中の還元・貢献活動</div>	<p>【帰国後還元・貢献活動】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center; margin-bottom: 10px;">帰国後の還元・貢献活動</div> <p>【阻害・貢献要因】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center; margin-bottom: 10px;">帰国後の還元・貢献活動</div> <p>【提案・要望】</p>	
<p>【参加動機】</p>			
<p>【制度認識と対応】</p>			
<p>【派遣中活動】</p>			
<p>【派遣中還元・貢献活動】</p>		<div style="border: 1px solid black; padding: 20px; text-align: center; min-height: 150px;"> <p>【還元・貢献活動概要図】</p> </div>	

【表 9-5:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.M.教諭(1/2)】
 (神奈川県横須賀市／神奈川県横須賀総合高校／ブータン派遣)

【概要】

- 経験教員: K.M.教諭
- 派遣国: ブータン(平成 12 年度 1 次隊)
- 職種: 体育教師
- 還元・貢献活動キーワード: 派遣中の壁新聞・手紙・写真による情報発信・コミュニケーション、派遣後の国際理解教育/開発教育プログラム、文化祭での展示、教科教育(保健体育)、人権教育
- 教育実践キーワード: コミュニケーションの質的变化(相手の表情を見ながらのコミュニケーション)、「常識」概念の変化、「豊かさ」概念の変化
- 備考: 制度以前参加

【参加動機】

- ・ 初着任先(中学)の同僚が青年海外協力隊(ケニア)に参加されていた方がおり、その方の「文明は低い文化は低くない」言う言葉に感銘を受け、自ら体験してみたいと思った。その後、高校転勤後「JICA 青年の招聘プログラム」に参加し、より途上国への興味を深めた。また、知人(教師でソロモンに協力隊派遣)の勧め。
- ・ 協力隊募集ポスターを見て応募したのち、仲の良い同僚の女性教師へ話した。校長(前職が教職員課課長)へ話した際は、その校長が派遣法による現職教員特別参加制度を知っており、参加の後押しとなる。しかし、横須賀市では高校教員に対しての現職職員参加制度の条例化がされておらず、校長が同市に対し、高校教員への派遣法を条例化に尽力したため、参加しやすくなった(横須賀市の高校教員の現職参加の初事例)。また、担任を持っていたが、後任の教師が協力的であったため、参加し易い状況でもあった。一方、校長以外の教師は協力隊や現職参加制度については認識を持ってはいなかった。

【派遣中活動内容】

- ・ ブータンの教員養成学校へ着任(養成学校での前任者はなし)。教員の候補生訓練のために派遣された(教員候補生を訓練することによって、ブータン基礎教育課程の子供に体育を普及させるため)。
- ・ 体育担任として各クラスに 1 限(70 分)を週 1 回担当。着任先ではそれまで実技の講義(実践教育)がなかったため、派遣中は実技指導(実践教育)を行った。

【派遣教員自身の変化】

- ・ コミュニケーションの難しさを感じ、言葉だけではない部分でのコミュニケーションを重要視するようになった。同じ言葉でも、人によって受け取り方の違いを考え、異なる視点からのその捉えかたを見るようになった。表情を見ながらのコミュニケーションを進めることで、派遣先の人々も歩み寄るようになってきた
- ・ 普通には様々ある、という捉え方ができるようになった。個々の違いは、国ではなく育った環境や過程によるものと考え、「みんな違ってよい」と思えるようになった。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 頻繁ではないが(2 か月に一回程度かつ不定期ではあるが)2 年間、連絡をとりあっていた。壁新聞、手紙、写真の交換をおこない相互に情報交換をしていた。



写真: ブータンの小学校での体育授業の実践
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 日本食を通じた国際交流活動
 【派遣中のボランティア活動】

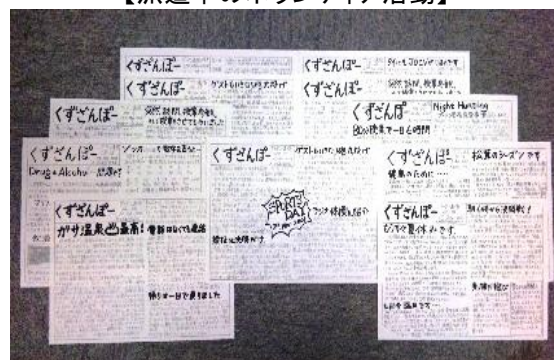


写真: 派遣中に派遣前学校に送付した
 ブータン壁新聞【派遣中の還元・貢献活動】



写真: 派遣中に前任校に送付した
 活動写真と活動報告【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-5(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.M.教諭(2/2)】
 (神奈川県横須賀市/神奈川県横須賀総合高校/ブータン派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)保健授業内で(健康についてなど)ブータンについての情報を織り交ぜた。(2)特別授業として年 1~2 回程度。ブータンの人権問題などについて教えている。(3)商業科選択科目「課題研究」のうち「地球市民入門」講座を受け持ち、派遣中のボランティアとのメール交換やユニセフハウスの現状を研究するなどをとおして、国際理解教育を実施した。
- ・ 学校(授業以外): (1)ブータンのGNH(幸福度指数)についての報告、(2)文化祭でのブータン展の開催。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ 阻害要因:部活顧問のため、時間的制約がある。
- ・ 貢献要因:帰国後の着任校が留学生を受け入れるなど、国際理解について積極的に取り組んでいる。よって周りからの理解を得られやすい。

【提案・要望】

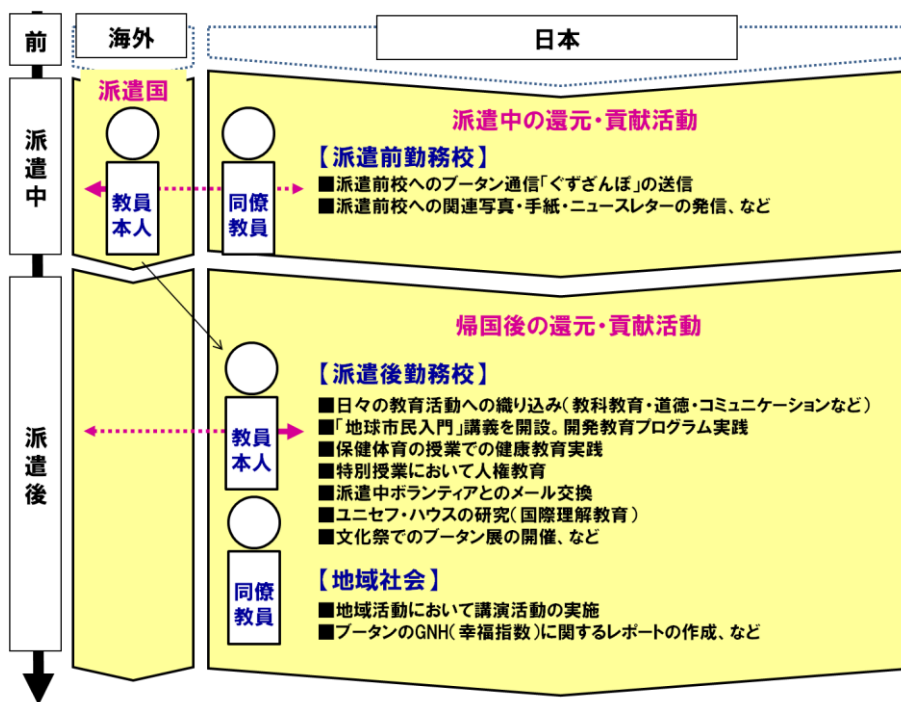
- ・ 現職教員特別参加制度について、知らない教員が多いため、協力隊参加の推進にむけた教員対象の講演会を開く必要がある。また、帰国後の隊員の生活や帰国後の教育現場での活用事例なども知れると、現職参加に対する壁が少なくなるのではないかと。
- ・ JICA と連携した教員対象の報告会を開き、未参加の先生方へ話せば、より協力隊への理解が深まるのではないかと。
- ・ 各校の校長の方々、教育委員会の制度認識が必要なのではないかと。



写真:「地球市民入門」の授業での生徒の調べ学習の発表(フェアトレード・教育など)
 【帰国後の還元・貢献活動】



写真:派遣経験を踏まえた視覚教材の開発
 【帰国後の還元・貢献活動】



【K.M.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-6: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: K.I. 教諭 (1/2)】
 (静岡県沼津市 / 沼津市立今沢小学校 / ホンジュラス派遣)

【概要】

- 経験教員: K.I. 教諭
- 派遣国: ホンジュラス (平成 14 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 在留外国人児童生徒・保護者対応, 国際理解教育/開発教育, 西語・英語を活用した週末学習支援, ペルー大使館・教育省との連携による算数教材開発, FM ぬまず初の教育番組の企画 (西和 2ヶ国語)
- 教育実践キーワード: コミュニケーションの質的变化, 「常識」概念の変化, 安全・危機管理能力の向上, マイノリティの経験を生かした生徒指導, 地域における多文化協働, 防災教育, 特別支援

【参加動機】

- ・ 初めて小学校で外国人担当 (南米の児童対象) をした際, 対応カリキュラムをつくるにあたり, 現地の教育を知る事で, 帰国後にも活かせるのではないかと考えた。
- ・ 現職教員特別参加制度を利用した隊員のの記事を読み, 今なら私にも出来る, 私もやってみたく感じた。

【制度認識と対応】

- ・ 当時教頭から本制度を紹介。出願時より市教育委員会や同僚教師も協力的で, 派遣前中にサポートをしてくれた。合格通知が早期に届き, 来期人事に関して学校側の負担が軽減。派遣法適用。帰国後も同校に勤務。

【派遣中活動内容】

- ・ 1 年目には, 算数プロジェクトに参加。教材作りや授業サポート, 指導書を活用した教育大学の教員再教育プログラムの講義を担当。学校訪問による授業改善実態調査を実施。2 年目には, 首都 Las Americas 小学校にて算数科の教育・教員研修を実施。日本大使館の日本語補習校講師として算数・日本語指導や文化庁共催の劇「米百俵」での箏曲演奏・指導等, 文化紹介。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 青年海外協力隊静岡県 OB 会による派遣前・中のつながりにより多視点が得られ充実した活動になった。
- ・ 現地では, 日本ともつながりつつ大使館や現地企業ともつながりながらニーズに対応した様々な活動を実施。
- ・ 現地を知る事で, 日本の「常識」が一部日本だけのもので, 現地経験を通して異なる「常識」に気づいた。
- ・ コミュニケーション能力が向上。西語に自信がつく。本校・市内在留の外国人児童生徒・保護者に対する橋渡しの存在となる。自身も異国滞在の経験をしているため, 苦勞を共感しつつ手助けできた。
- ・ 安全・危機管理能力が向上した。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 日本の生徒達と手紙やビデオレターの交換。
- ・ 朝日新聞からの原稿依頼を受け投稿。読者からの手紙・文具・算数セット等の寄贈。手紙・写真の送付。
- ・ 日本の同僚教員に協力をお願いし必要な教具を送ってもらった。日本企業の間組 (はざまぐみ) の無償援助による教師用算数教具の作成・寄贈。特別算数講習会を開催し使用方法を講習した。
- ・ 教育大学からの依頼を受け, 特別支援を要する児童に対する数概念形成に効果的な学習具を使った授業について教員対象講義を実施。



写真: TANOSHIKAI メンバーとの連携による西語・英語を活用した週末学習支援 (原地区センター)【帰国後の還元・貢献活動】



写真: JICA 南米算数教師研修の参加者に対して算数教材を紹介 (TANOSHIKAI 代表と)【帰国後の還元・貢献活動】



写真: 特別支援学校にて算数の授業実施風景【帰国後の還元・貢献活動】



教科書の翻訳 (学校内授業にて活用)【帰国後の還元・貢献活動】

【表 9-6(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.I.教諭(2/2)】
 (静岡県沼津市/沼津市立今沢小学校/ホンジュラス派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)国際教室用のカリキュラムを特別に作成し、みんなで企画した授業が出来るように配慮した。(2)外国の言葉・物品を使用した開発教育プログラムの実施。(3)西語や英語などによる外国語活動。(4)普通教室に通う子供達にも国際教室の授業に参加してもらい、一緒に学習する事で国際理解を促した。
- ・ 学校(授業以外): 壁新聞として現地での活動や現地の情報などを作り、学校の廊下に掲示した。国際教室の掲示。ロング昼休みに体験コーナー、国際集会開催。
- ・ 学校外(在留外国人児童生徒・生徒保護者対象): (1)本校児童・地域の国際理解教育プログラムの実施(2)TANOSHIKAI・APEBEMOメンバーと共に西語・英語を使った算数・社会・言語の勉強会を原地区センターにて週末(土・日)開催。、(3)算数ワーク作成(1-6年)、(4)沼津市原地区センターにおける文化交流(Latin hara)、(5)ペルー教育省とTANOSHIKAI共同による算数教材の開発、(6)西語・英語の児童用図書をペルーへ寄贈、(7)沼津市立図書館を通して原地区センター内図書館支所に西語等児童用図書を寄贈、(8)病院や各種申請などにおける翻訳・通訳のサポート



写真:海外研修・研究等助成事業における分数カードを使った公開授業(6年生) TANOSHIKAIメンバー他の参観【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における障害・貢献要因】

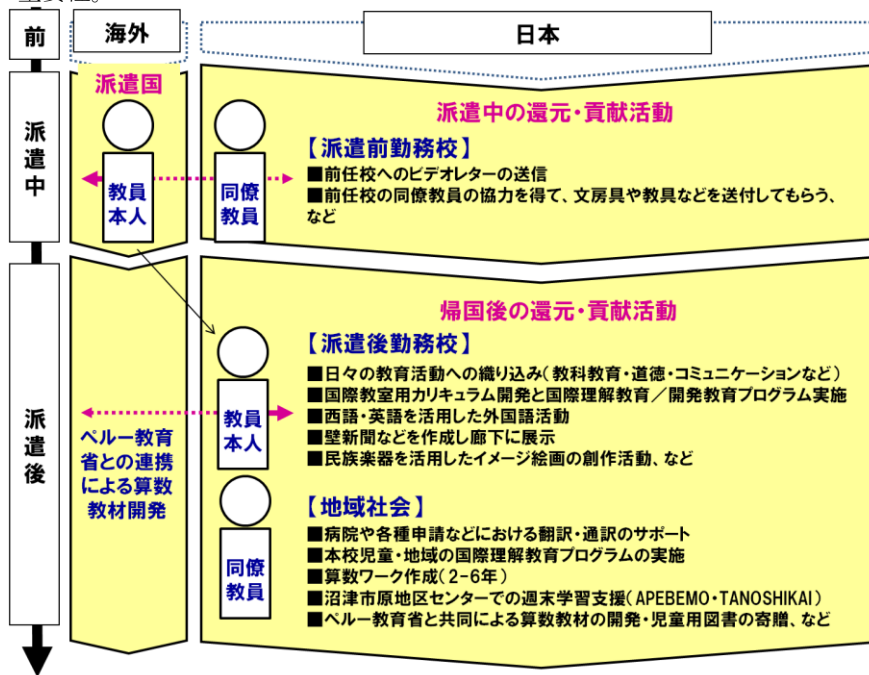
- ・ 障害要因: なかなか時間が十分に生み出せない。
- ・ 貢献要因: (1)沼津市内にある沼津教育振興会の国際理解教育担当が全ての学校にあること。また、その担当者が定期的にあり、外国人児童生徒が交流会によってつながれる事。(2)算数担当や授業担当となる事で、通年を通して関わって行くことが出来る。

【提案・要望】

- ・ 帰国隊員の語学力を活かして、日本に滞在する外国人児童生徒・保護者に対する生活支援活動の重要性(通訳や翻訳)とその活動の推進にむけた体制づくり。
- ・ 外国人児童生徒の保護者に対して適切な進路情報を伝達することの重要性。



写真:ペルー教育省における教育技官対象セミナーでの算数・数学教育技官との教材製作に向けた会合。学習用具を使う、TANOSHIKAI作成学習プリントを活用した地方の算数基礎学力向上のためのプロジェクトについて議論がもたれた。【帰国後の還元・貢献活動】



【K.I.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-7: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: N.N. 教諭(1/2)】

(茨城県守谷市／守谷市御所が丘中学校／ドミニカ派遣)

【概要】

- 経験教員: N.N. 教諭
- 派遣国: ドミニカ(平成 16 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 生徒指導, キャリア教育, 学校行事(バザー), 寄付活動, 後輩教員(隊員派遣)連携による国際理解教育/開発教育
- 教育実践キーワード: 経験に基づく言葉の説得力, 放任主義(教育的意味を有した), 広い視野と動じない態度, 児童生徒の個別指導

【参加動機】

- ・ 海外の学校教育現場を見に行きたいという思い。また、子どもたちに対して言うことに説得力を持たせるため。

【制度認識と対応】

- ・ 募集を職員室の回覧で知った。協力隊の応募に関して校長に相談をしたところ、応援する姿勢を見せてくれた。同僚に迷惑をかけたくないという思いから、同僚には内密にしてほしいと校長に強く要望した。
- ・ 同僚に協力隊に参加する事を伝えた際に、負担がかかることを承知の上で、応援してくれた。

【派遣中活動内容】

- ・ ドミニカ共和国の小学校へ着任(プロジェクトの前任者あり)。算数の授業の立て直しが主な活動だったが、最初の1年間は、あまり効果がでなかった。
- ・ そこで、子どもではなく先生を動かそうと思った。まず、現地の4人の先生にめぼしを付けて、授業のアドバイスをを行った。その4人の先生に他の先生を教育してもらおうと考えた。そうすると子どもたちはすぐに力を付けていき、他の教師達も筆者の作成した資料・プリントなどを欲しがらなくなった。ワークショップを受ければ、プリントを提供するという条件をつけると、すぐに参加してくれた。そこで現地の先生にワークショップをしてもらった。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 教育に対する姿勢が変わった。子どもたちを見守るようになった。日本では子どもが成功するように手を掛け過ぎている。以前はうるさい教師だった。しかし派遣後には、先生らしくない先生と、生徒たちから言われるようになった。他の先生とは、違う何かが宿ったと感じる。
- ・ 経験に基づき言葉に説得力が増した。また、教育を、個々人の生徒に対して考えられるようになった。学校という組織の中ではなく、もっと広い視野で子供たちを見ることが出来るようになった。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 交流はあえてしなかった。自分の代わりにクラスを受け持ってくれている先生に対して失礼だと思っていた。
- ・ 卒業間近には近況報告も兼ねて、ビデオレターを送付。

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1) 当時担任の英語クラスで、ドミニカの子供たちへの文房具の寄付活動で集めた新しい鉛筆と短くなった鉛筆を見せ、短くなった鉛筆を皆さんは使いますか、と質問。途上国の子供たちも同じ人間だよという授業をした。(2) 帰国後、グアテマラに隊員として派遣された先生のクラスを受けもたせてもらい、自身の経験とグアテマラでの活動を交えた総合的な学習の時間(国際協力がテーマ)の授業を展開。



写真: ドミニカでの理数科教師への指導
【派遣中のボランティア活動】



写真: 教師によるワークショップ実施と指導風景
【派遣中のボランティア活動】



写真: ドミニカでの理数科教師による教育実践
【派遣中のボランティア活動】



写真: 現地教員と考案した飴の棒を使った
理数科教具
【派遣中のボランティア活動】

【表 9-7(つづき) : JOCV 海外教育経験教員の取組事例 : N.N.教諭(2/2)】
 (茨城県守谷市 / 守谷市御所が丘中学校 / ドミニカ派遣)

- 学校(授業以外) : (1) 学校行事(バザー)で, JICA(協力隊)の活動を紹介するブースを出展。(2) それと共に, 生徒たちと協力して, ドミニカの子供たちに文房具の寄付活動をした。集まった文房具をドミニカに持って行った。
- 学校外 : 協力隊を育てる会の方と協力して, 帰国隊員ネットワークを作ったが, 実際には活動できていない。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- 阻害要因 : (1) 教師としての仕事の忙しさ(部活・行事)。(2) 学校の組織としてのしづらみ(学校の規則や行動の規制)
- 貢献要因 : 協力隊を育てる会や JICA 筑波などによる還元・貢献活動に対するサポート。

【提案・要望】

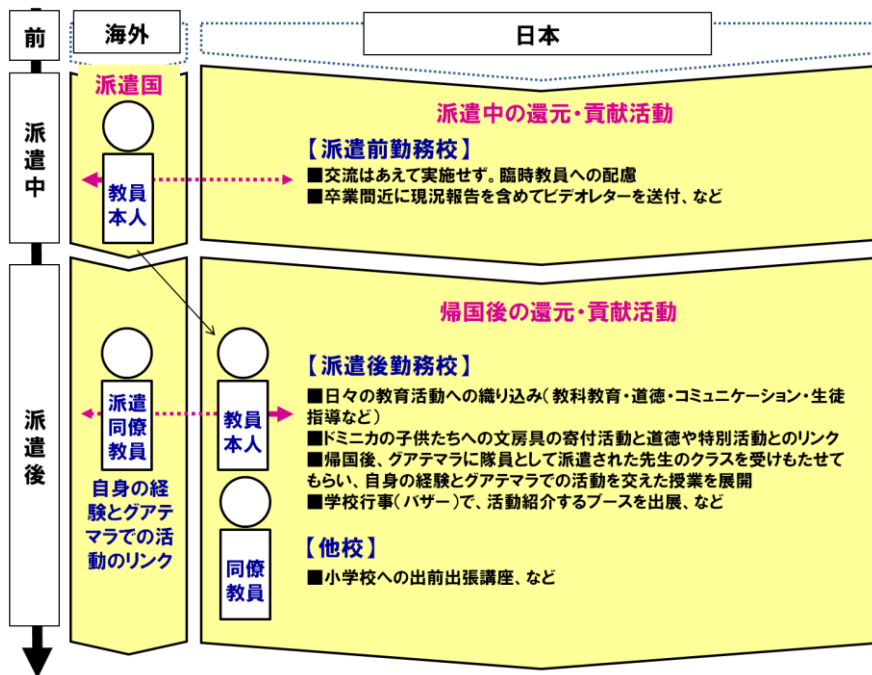
- 同僚たちに, 現職教員派遣制度についてもっと知ってもらう施策が必要。
- 自分自身をもっと活用してほしい。そのための制度や機会が必要。
- 帰国した隊員に対してのアフターケアの重要性。
- 帰国隊員の授業を見せてもらう機会があったが, 社会科のような授業だった。国際理解教育の本質をもっと考えるべき。



写真: 小学校への出前出張講座
 (国際理解教育/開発教育)
 【帰国後の還元・貢献活動】



写真: えんぴつの寄付にむけた PTA を
 巻き込んだ回収活動
 【帰国後の還元・貢献活動】



【N.N.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-8: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: H.K. 教諭(1/2)】
 (埼玉県さいたま市／さいたま市立本太小学校／ウガンダ派遣)

【概要】

- 経験教員: H.K. 教諭
- 派遣国: ウガンダ(平成 19 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 派遣中の参加型学年通信, 近隣小学校との連携による国際理解教育/開発教育, 起業家教育, PTA・地域住民を巻き込んだバザーの開催とフェアトレード
- 教育実践キーワード: 「異文化理解」概念の変化(価値の押しつけから認識・受容へ), 日本の教育力の高さ, 派遣前・中の還元・貢献の可能性, 日本での近隣小学校との連携による教育実践



写真: 研究授業の風景

【派遣中のボランティア活動】

【参加動機】

- ・ 大学生の頃に不登校の子供に向けて指導を行っていた。その際に対象者の子供に教えるのではなく、逆に教えられているのを感じた。二十歳の時に青年海外協力隊のポスターを見て、「この子供からはどんなことを教えてもらえるのだろうか」と、魅力を感じ応募した。

【制度認識と対応】

- ・ 教師になる前には現職教員特別参加制度については知らなかった。しかし、青年海外協力隊への参加については大学生のころから興味があり、いつかは参加したいと考えていた。その旨を職場教員の方に話をしたところ、当時の校長(加々美健一先生)から現職教員特別参加制度について「夢があるっていいね」などと、前向きな言葉を頂いた。
- ・ 試験に合格したものの、人事的理由で児童生徒にアフリカ行きを伝えられず気持ちを共有することができなかったということに悔いが残る。

【派遣中活動内容】

- ・ ウガンダ、ヴィクトリア小学校へ着任。教員同士で授業を見せ合い、子どもたちにとってよりよい授業をめざす研究授業に力を入れた。子どもたちに九九の歌をつけて、九九を覚えさせるなどの教育実践を行った。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 異文化を正すという考え方から、認識する、受け入れるという考え方へ変化していった。
- ・ 小学校で行っていた、学校だより、学年便り等の掲示物を利用した周囲への働きかけや日本の問題解決的な指導法などを派遣先でそのまま活用することが出来た。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 日本で協力してくれた子ども達が、自分達でバザーの売り上げをウガンダの小学校へ寄付するなど国際貢献に主体的に参加し、寄付したお金の使われ方まで議論をしたプロセスが見られたこと。これにより子どもたちへの国際協力への意欲が高まった。
- ・ 毎月 2 つの近隣小学校(常盤小学校, 大宮小学校)にウガンダ通信として、現地の情報を発信。
- ・ 近隣小学校に関しては、二年目からクイズ形式で用紙を作るようになり、参加型の学年通信へと変わった。



写真: 近隣小学校(常盤小学校)へ送付したウガンダからの手紙

【派遣中のボランティア活動】



写真: 別所教諭と同僚教諭(常盤小学校)との連携によるウガンダとの交流プロジェクトの展開

【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-8(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:H.K.教諭(2/2)】
 (埼玉県さいたま市/さいたま市立本太小学校/ウガンダ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業):道徳の副教材を独自で作り,同僚とともに推敲を重ねている。
- ・ 学校(授業以外):毎週 1 回の学級通信で,ウガンダについて取り上げている。更に,道徳の授業で保護者を含めウガンダの子どもたちについての講義をした。
- ・ その他:小学校の別所先生と協力隊同期の内田隊員共に,ウガンダの子どもたちを日本へ招待した。その交流によって,子ども達は今でも文通などでかかわりを持っている。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ 阻害要因:(1)帰国してからの短い準備期間。(2)2 年間派遣されていたことによる時間に関する手助けがないこと。
- ・ 貢献要因:派遣前の上司であった先生(別所先生)が協力的に手助けをしてくれたこと。これにより,子どもたちにウガンダのことについて伝えるきっかけをつくる事ができた。

【提案・要望】

- ・ 良い同僚を持って任地へ行くこと。現職隊員ならではの特徴をもっと活かすべき。
- ・ 協力隊員になる事を生徒に事前に知らせることによって,子どもたちと一緒に学びを深めることが出来る。
- ・ 派遣前と派遣中こそ,何かアウトプットが出来る最大のチャンス。

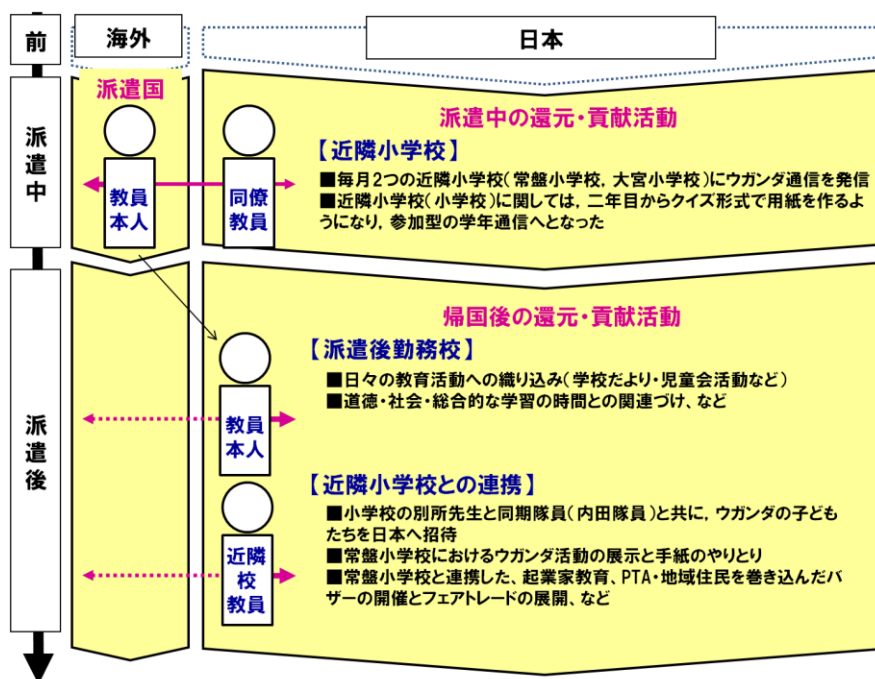


写真:学級通信を通しての国際理解に対する意欲の喚起

【帰国後の還元・貢献活動】



写真:常盤小学校におけるウガンダ交流と工芸品のバザー風景【帰国後の還元・貢献活動】



【H.K.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-9: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: H.S. 教諭(1/2)】
 (神奈川県平塚市／平塚市立松原小学校／ベトナム派遣)

【概要】

- 経験教員: H.S. 教諭
- 派遣国: ベトナム(平成 15 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 国際理解教育/開発教育, 総合的学習の時間, 学級運営, 経験を応用したボリビアとの連携プログラム, 教育委員会や同僚教員との連携した国際教育プログラム
- 教育実践キーワード: 教育観の変化(伝える・教えるから繋がる・引き出すへ), 価値観の尊重, 直接指導から間接指導へ, 日本の積み重ね学習の強み, 「言葉の力」の再認識, 「表現できる子」を育てる, 子ども同士の対話能力, マイノリティ経験を生かした学級運営



写真: ベトナムでの体育授業の実践
 【派遣中のボランティア活動】

【参加動機】

- ・ 民間勤務を通して社会経験を積んだつもりであったが, 総合的学習の時間が始まり, 20 代半ばの経験では太刀打ちできないと考え, 自分の成長のために参加。

【制度認識と対応】

- ・ 教務の先生から派遣制度の紹介があった(平成 14 年採用されて 3 年目の春)。職場での反応は特になかった(朝の打ち合わせ時は多忙なので)。
- ・ 3 年目の教員が受かるとは誰も思っていなかった。理解ある校長先生が推薦書を書いてくれた。6 年生担任であったため, タイミングが良かった。合格を知った周りの中には日本人学校に行くものだと思っていた人もいた。それ程 JOCV 派遣に対しての認知がなかった。

【派遣中活動内容】

- ・ ベトナムにおいて体育と図工の授業実践。ベトナムで体育というと教員の場だった。ドッジボールや鬼ごっこは遊びとして捉えられた。日本的な体育授業の必要性を伝えるために指導案を, 現地の同僚と作成した。(2) 技術を伝える上でも, 口頭ではめあてを伝えづらいため, 文書化された指導案は大変役に立った。

【派遣教員自身の変化】

- ・ JOCV は技術を伝えたいと思う人が多い。自分も頑なに日本の教育や技術を教えようとしていた。しかし向こう側としては, 何者かもわからない人に授業など持たせてもらえない。最初は授業を後ろで見ているだけだった。ベトナムは 20 代教員が圧倒的に少なく, 先輩女性教員が多い。個人的な繋がりを持ったのも先輩女性教員だった。
- ・ ある日気持ち吹っ切れ, まず楽しむことを考えた。行事に積極的に参加するようになった。それ以降, 校長を介さない個人的な繋がりが出来ていった。2 年間の経験を通して自分自身の価値観が変わった。想いを伝える, 教えるが教育だと思っていたが, 繋がる, 引き出すことが重要だと思ふようになった。
- ・ 休み時間の使い方の違い。日本では休み時間も子どもに費やす。ベトナムでは教員とのコミュニケーションに費やす。業務が終わる 17 時以降, 子ども達とのコミュニケーションに時間を費やした。ベトナムは積み重ねの授業が少なく, 1 時間 1 時間が独立した授業だった。1 時間完結型授業が主流。日本は積み重ね型=単元学習型の授業が主流。

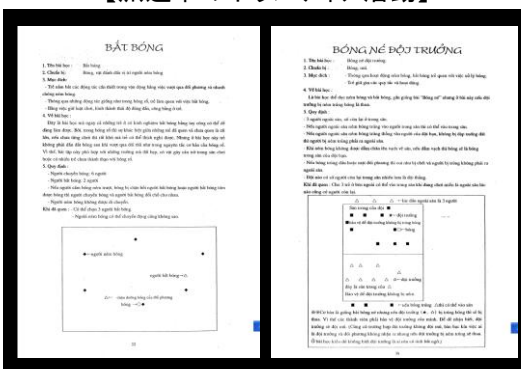


写真: ベトナムでの体育授業の教案集の開発
 【派遣中のボランティア活動】

- ・ 日本の学校の方がモノがあふれていることを認識(縄跳びや跳び箱など)。
- ・ まずお互いのやり方を尊重して, それを受け入れられてから自分の意見を通す, 通るということ再認識した。
- ・ 特別な国際理解教育が教育の幹になるわけではないことを理解した。日々の学級運営の中でどう子ども達と物語を作っていくかが重要であることを認識した。今の子どもは遊びの中でコミュニケーションが少ない。その結果自分の想いを言葉で表現, 伝える力が弱くなってきている。言葉の力を嫌というほど思い知った協力隊員だからこそ言葉に焦点を当てた教育を展開していきたい。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ ベトナムでの生活, 活動をメールマガジンで友人, 同僚, 教え子に伝えていた。悩み, 葛藤といった主観的なものは伝えず, ただ起こった事実のみを伝えていた。

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): 日々の教育活動への織り込み
- ・ 学校(授業以外): (1) ボリビアの児童と平塚市立松原小学校の児童とのネット会議を柱とした総合的学習の時間の展開。(2) ベトナム・ニンソン小児童との絵画共同制作を通じた異文化交流。(3) 学級には両親が外国籍の児童が数名おり, 担任である私自身が協力隊 OV であることが, 学級運営に役立っている。
- ・ 学校外: ボリビアやベトナムとの国際教育活動は, 学校内だけでなく, 上司・同僚の教員, 平塚市, 教育委員会, JICA, ケーブル会社(湘南ケーブル)の協力のもとで実施。

【表 9-9(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:H.S.教諭(2/2)】
 (神奈川県平塚市／平塚市立松原小学校／ベトナム派遣)

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ **阻害要因:** (1)先生方の中には JOCV と日本語学校の区別がついていない人が依然存在する。(2)協力隊活動という特別な経験をしてきた先生の体験を還元する時間がないほど忙しい。
- ・ **貢献要因:** (1)直接的指導から間接的指導へと変わった。言える子を育てようという気持ちになった。(2)協力隊活動を還元・貢献する方法は子どもの接し方などで活用している。従来は子どもが問題を起こした際、問題を起こした生徒をただ叱っていた。今では当事者同士の話し合いの場を設け、お互いの思いを伝え合う方法を取っている。この考え方は行く前ではなかった考えた方である。(3)討論の授業をしていた際、学年主任の先生が意見の言い方はこういうことであると自分のクラスの生徒を順番に連れてきた。

【提案・要望】

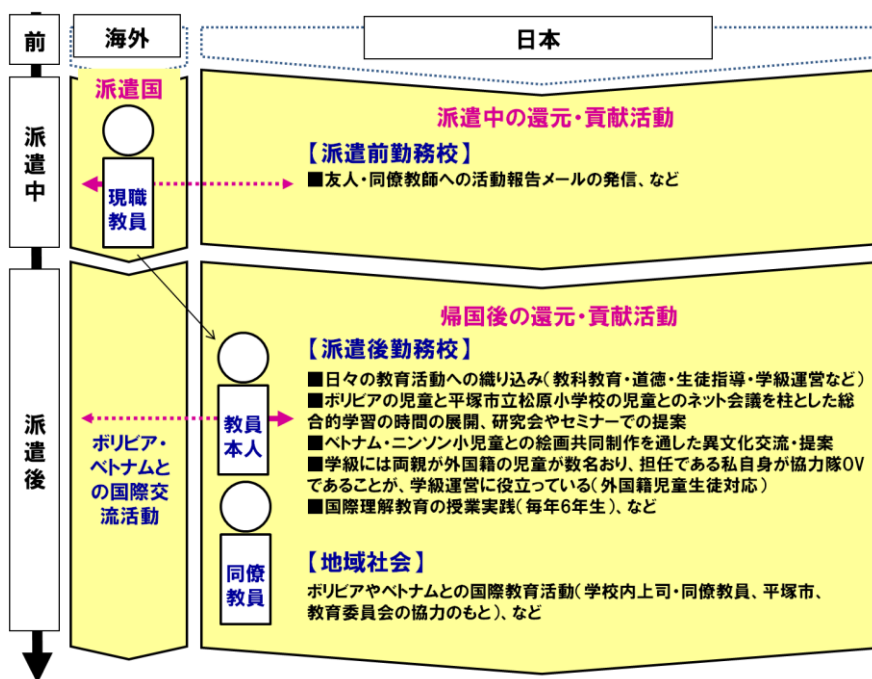
- ・ 今後派遣制度を若い教員達に紹介していきたい。実際何人も受験しているが、募集枠が少ないため合格できない現状がある。
- ・ 今後派遣制度を推進行していくために、予算を充実させるべきだと考えている。実際に行きたくてもお金の関係で行けない教員が多い。
- ・ 直接的に国際理解教育をすることだけが協力隊活動の還元ではないということを引き続き提案していきたい。
- ・ 実践報告の場を広げ、帰国後の活動について共有していきたい。
- ・ 同時に勤務校においても積極的に学校研究などの場で提案していくことが大切である。



写真:ベトナム・ニンソン小学校と松原小学校の生徒による共同絵画制作:「ぼくら地球の未来っ子」、文部科学省・国際理解教育実践事例集に紹介される【派遣後のボランティア活動】



写真:ボリビアの小学校とのインターネット交流与習字の紹介【帰国後の還元・貢献活動】



【H.S.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-10:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.O.教諭(1/2)】
 (宮城市仙台市／仙台市立南光台東小学校／フィリピン派遣)

【概要】

- 経験教員: K.O.教諭
- 派遣国: フィリピン(平成 19 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 総合的学習の時間, 外国語教育, 国際理解教育/開発教育, 紙芝居を活用した国際理解教育
- 教育実践キーワード: 日本の教育教材の質の高さ, 教材の質的改善, 授業改善(要点整理と明確な伝達, 丁寧な授業運営), 同僚との連携による教育実践, コミュニケーション能力の向上, メンタリティーの向上

【参加動機】

- ・ 豪ワーキングホリデー時代に仲間より協力隊について知らされ興味を持つ。当時はスキル不足と感じ教員として数年経験を積み参加する準備をした。初任 3 年目の異動に伴い, 落ち着いた 5 年目に参加を考える。
- ・ 海外にある日本人社会での教育活動ではなく, 現地の教育現場での実践を希望。日本人に教えるのではなく, 地元の方々へ貢献をしたいという思い, 海外への興味と自らの仕事に一致する点があった。

【制度認識と対応】

- ・ 教員採用試験に受かり, 初任時に学校掲示, 学校回覧で情報を得る。その後インターネット等で情報収集。
- ・ 同僚の先生には協力隊へ受かるまで公表せず。合格後, 学年主任, 同僚は「頑張ってきてください」と深く興味は示さなかった。校長, 教務主任が日本人学校経験者のため, とても派遣に協力的であった。また, 当時の校長は推薦書など積極的に協力してくれた。

【派遣中活動内容】

- ・ 小学校の算数教師として派遣(理数科英語の研修), 地域の学校巡回指導。カウンターパートの指導主事と共に学校の教師達への模擬授業, 研修指導, 教材開発, を行った。教材開発では動きを見せる事に配慮して子供の関心を惹くよう作成。
- ・ SBTP(School Based Training Program)(現職研修)プロジェクトの中での教員研修授業(数学教師への)を月 1 回持った。派遣先地域では NGO の活動にも所属し, ゴミ問題への取組も行う。派遣半ば, SBTP がプロジェクト終了となり, 台風被害などにより, その時期は本来の業務ではなく, 復興支援をすることが多くあった。
- ・ フィリピンの教師は日本では当たり前のような数学等の法則を知らず, 指導をする必要があった。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 日本の教育教材の素晴らしさに改めて気づいた。誰でも理解出来, おちこぼれというものを作らない仕組み。それに対してフィリピンの教材は流れが一定ではなく, スムーズな教育が出来ない現状があった。
- ・ 途上国の人は一瞬一瞬, 毎日を楽しみながら大切に生きていることを知ってからにはかわいそうだと思うようになった。
- ・ コミュニケーション能力やメンタリティーの向上については, 協力隊派遣が初めての外国ではなく, 特に変化を感じる事はなかった。派遣中常に良いこと, 悪いことの波があり, それは毎回切り抜けて行っていた。



写真: 派遣校での教育実践活動
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 教員研修での発表風景
 【派遣中のボランティア活動】

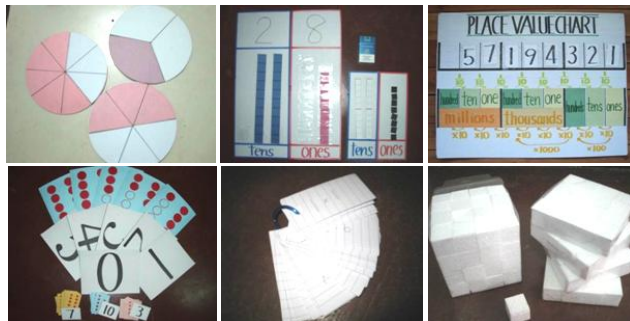


写真: 現地で開発した理数科教育関連教材
 【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 帰国後の授業で, 教材づくりの経験から, 伝えたい要点をシンプルかつクリアに示すことが出来るようになった。また, 子供たちの内容理解のため, より丁寧な授業が出来るようになった。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 派遣前在任校へ新聞を送付し, 教務の先生に壁に掲示してもらった。また, 前任校の同僚教師や保護者の協力により, 余った教材を送ってもらい, 派遣先各学校に置き, 更には使い方の指導も行った。
- ・ 教材活用の様子を写真に撮り, 派遣前在任校へ送ることも行い, 派遣前校からは絵を送ってもらう(言葉が通じないことに配慮して)。しかし, それを元にした授業や国際理解の取組は無かった。

【表 9-10(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.O.教諭(2/2)】
 (宮城市仙台市／仙台市立南光台東小学校／フィリピン派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- 学校(授業): (1)「フィリピンの死亡率」について 5 年生のクラスにゲスト教師として授業を行った。そこでは、フィリピンの人達の生き方にもふれ、本当に貧し事が不幸せかなどについても日本の子供たちへ考えさせることも行う。これは道徳の時間の世界の日本のつながりを考える授業の一環として行った。(2)3 年生に対してはフィリピンの楽しい所を伝える授業を紙芝居形式で行った。(3)英語授業のアシスタントとして参加し、終わり 10～15 分などでも経験などについても述べた。(4)二本松訓練所にて OV DAY 講師として後輩へボランティア体験を話した。
- 学校(授業以外): 今までに訪問したことのある国を題材とした壁新聞、資料を作成、掲示。
- 学校外: (1)「宮城県協力隊を育てる会」での出前授業、(2)2010 年 1 月 7 日の筑波大での発表。(3)帰国後 4 カ月後に派遣先を再度訪れた。



写真: 国際理解のための学内展示ブース
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

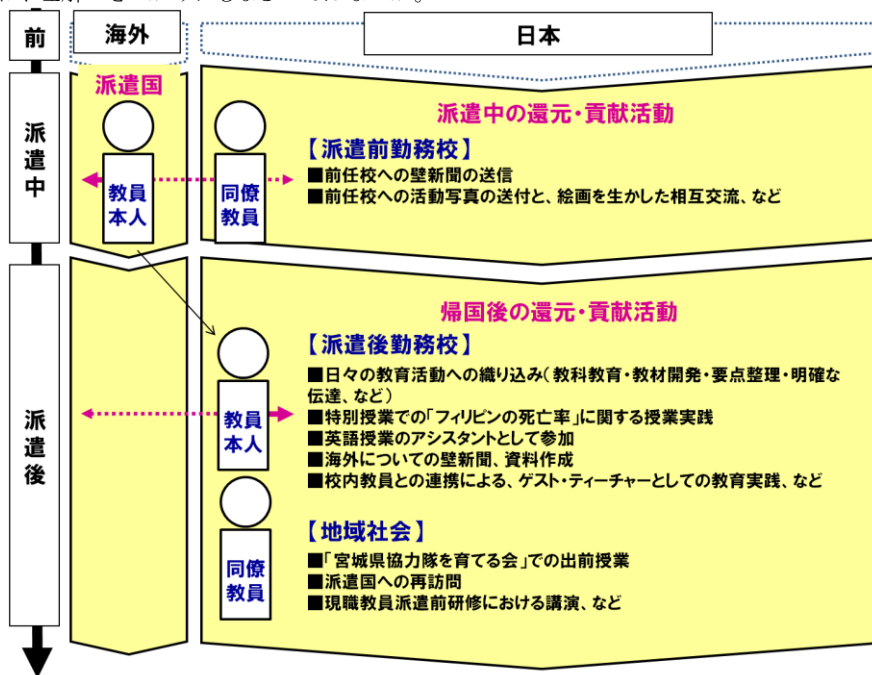
- 阻害要因: (1) 学校(校長, 同僚等)による制度の認識不足, (2) 帰国後は自分と自分の活動について知っている同僚, 上司が少なく, 自分の経験, 強みを上手く活かすことが出来なかった。
- 貢献要因: 4-5 年生の先生達の協力があつた。派遣前に送り出してくれた先生が初めに授業に招待してくれた。これがきっかけとなり, ゲスト・ティチャーと呼ばれる機会が増えた。同僚とのつながりもよく, 今では自信の強みを活かす機会がある。



写真: 経験を生かした紙芝居づくりと朗読活動
 【帰国後の還元・貢献活動】

【提案・要望】

- 学校(校長, 同僚等)の理解が第一。人事を適材適所で行うべきと思う。帰国後 1 年程度は担任をはずれ, 学科専任になれると自分の強みを活かす機会が生まれると思う。
- 派遣決定をより早い形で前任校の子ども達へ伝えたかった。事前, 事後までの流れの中で話をすれば子供たちの外国への興味や理解のきっかけにもなるのではないか。
- 帰国後すぐに日本の教育現場への復帰に対しては, すぐに行われているが, この点に関しては, 逆に期間が長くないほうがよい。これは, 期間が長くてもする事がなく, 時間を持て余してしまう。しかし, 帰国後すぐは教育現場より離れていたため, 元の生活に戻るのに苦勞をした。



【K.O.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-11:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:N.T.教諭(1/2)】
(宮城県仙台市/仙台市立鶴巻小学校/ジンバブエ派遣)

【概要】

- 経験教員:N.T.教諭
- 派遣国:ジンバブエ(平成9年度1次隊)
- 職種:小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード:水の大切さを伝える環境教育実践, 募金活動, 生徒指導, 学級運営
- 教育実践キーワード:万国共通の子どもの笑顔, 日本の常識・世界の非常識, コミュニケーション手段としての英語, 安全管理・危機管理能力の向上, チャレンジ精神, 現実と理想を教える役割(教育者果たす役割の認識変化), マイノリティ経験を通じた外国籍児童生徒への配慮, 子ども達との信頼の構築
- 備考:派遣後に教員へ

【参加動機】

- ・大学3年までは海外については考えておらず, 教師になることのみを考えていた。休暇中シドニー(豪)に行き, 偶然ワーキングホリデー中の友人(後にパラオにJOCV派遣)と出会い, 海外で生きている事のカッコよさを見出した。エアーズロックへの観光中・帰路旅行中のヨルダン派遣の看護師と遭遇し, 彼女との出会いが協力隊への関心を高めるきっかけともなり, 参加。
- ・保健体育の教員資格があり, 保健体育分野での参加。
- ・2年の回り道をして, 子供たちに経験に基づく言葉で海外の話をしてあげたいという想いがあった。
- ・大学の指導教授に相談したところ, 実は多くOBや先輩に協力隊, 日本人学校教員, サッカー留学を考えている人もおり, 周囲の反応は穏やかであった。

【派遣中活動内容】

- ・3~7年に各学校, 週2コマの体育授業を受け持った。派遣先には前任がおり, それを引き継いだ形となった。
- ・派遣先国では男子はサッカー, 女子はネットボールなどという固定概念があったため, それを払拭するために様々なスポーツを紹介するという形での授業を行った。
- ・日本の協力隊だけではなく, 他国の協力隊制度が活動の助けともなった。
- ・派遣先国では100人程の協力隊員がおり, その中でも体育隊員が多く, 教育活動を行うにあたり, 協力, 相談する事が可能であった。派遣先には教員派遣隊員が同僚にあり, 共に様々な指導案を作り実践した。

【派遣教員自身の変化】

- ・大学卒業後すぐに派遣されたため, 教員経験がなく, また言語もあまり通じない部分があったため, 実際に実践して教える方法をとるようになる。何に対しても試す, 実践というようになった。同僚の教育関連隊員の協力のおかげで, 教育方法の幅を広げることができた。
- ・こどもは先進国, 途上国どちらでも「くったくのない笑顔」を見せてくれるものだと思うようになる。
- ・モノ, 水など身の回りのことの大切さについて日々考えるようになった。



写真:ジンバブエの派遣先における体育授業に参加する児童生徒らと
【派遣中のボランティア活動】

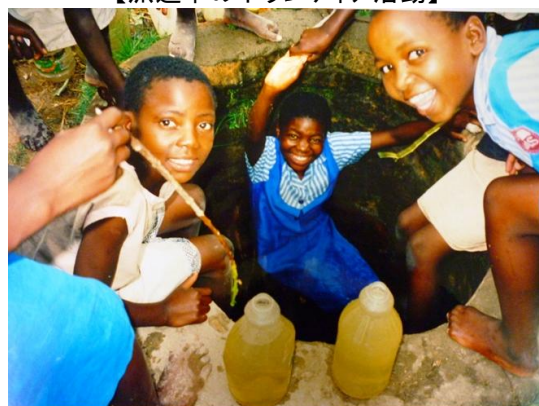


写真:派遣国における井戸水の汲み取り作業風景
【派遣中のボランティア活動】

- ・帰国後90日間の臨時採用期間, 日本の子ども達もジンバブエの子ども達もそれぞれ置かれている環境が異なるだけであると思うようになった。
- ・英語に関して, 文法や発音にこだわるのではなく, コミュニケーションの一方法でしかないと思える様になった。
- ・ジンバブエでの経験によりリスクに動じない免疫がついた。子どもは先生の気構えを読み取るのが上手く, このような変化により, 子ども達との信頼構築の助けとなった。
- ・子ども達に人生の岐路に立ったときに逃げるのではなく, チャレンジし, 失敗しても負けず次の何かに繋げられる力をつけられたらと考えている。
- ・教師は勉強という現実と夢などの理想を教える職業と捉えるようになった。

【表 9-11(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:N.T.教諭(2/2)】

(宮城県仙台市/仙台市立鶴巻小学校/ジンバブエ派遣)

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 派遣時教員採用前のため無し。

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)日々の教育実践への織り込み, (2)派遣国写真を活用した「水の大切さ」を伝える環境教育。
- ・ 学校(授業以外): (1)ユニセフ募金などの実施期間に, ただ募金を持ってくるように言うだけでなく, 派遣時の経験など, 様々な話をクラスの子も達に行った。(2)初任の養護学校で, 担任クラスに外国人の子どもが入りその際に協力隊での経験, 英語を生かすことが出来た。(3)又, 海外で暮らす外国人の気持ちを理解する事ができ, マイノリティ経験を生かした外国籍児童生徒を行うことができるようになった。

【還元・貢献活動における障害・貢献要因】

- ・ 障害要因: (1)帰国後, 隊員への優遇措置の無さ, (2)JICAによる帰国隊員への支援活動の少なさ
- ・ 貢献要因: 派遣中の海外経験による隊員自身の変化

【提案・要望】

- ・ 教員採用の枠組みの中で, 協力隊を評価し, 優遇する仕組みがあればよい。カナダやアメリカでは実際に海外教育経験が人事評価の対象となっている。
- ・ 今後は子ども達, 先生共に, 日本がどれだけ恵まれているか, 伝えていきたい。
- ・ 現職で参加するに当たり, 単身ではなく同伴で行けるような制度が必要(実際に日本人学校は同伴が可能である)。
- ・ 現職派遣での3年という枠組みは無くしたとしても, 3年は実務経験がなければ協力隊へ行こうとは考えないのではないだろうか。



写真: 派遣国の写真を活用した「水の大切さ」を伝える環境教育教材の開発と教育実践
【帰国後の還元・貢献活動】

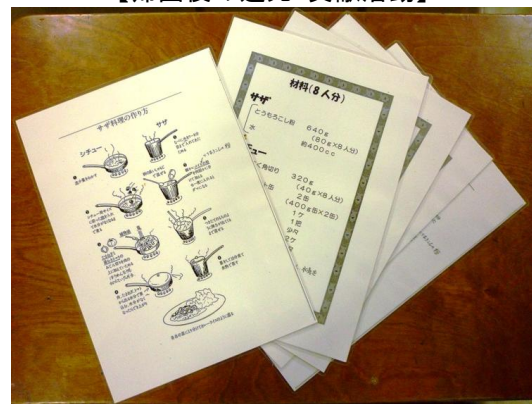
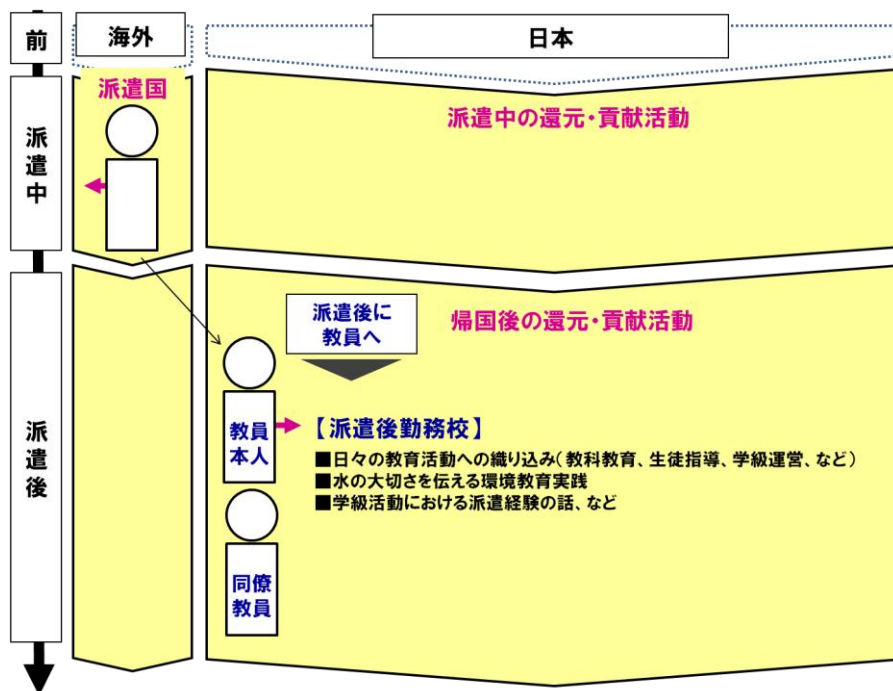


写真: 派遣先の料理(サザ料理)のレシピ作り
【帰国後の還元・貢献活動】



【N.T.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-12: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: Y.Y. 教諭(1/2)】

(東京都町田市／町田市立南つくし野小学校／タンザニア派遣)

【概要】

- 経験教員: Y.Y. 教諭
- 派遣国: タンザニア(平成 12 年度 2 次隊)
- 職種: 理数科教師
- 還元・貢献活動キーワード: 派遣中教育関係
隊員同士の学び合い(タンザニア教育研究会)、
活動情報の発信, 国際理解教育/開発教育, 総
合的学習の時間, 道德教育, ICT 活用の国際教
育, 関東教育支援ネットワーク
- 教育実践キーワード: 行動力の向上, 地球人とし
ての世界観の醸成, ICT 活用がもたらす国際理
解, 経験隊員のネットワーク構築と教育実践研究
- 備考: 制度以前参加

【参加動機】

- ・ 広い世界に飛び出し, 直接, 人と接し, 人の役に立つこと
がしたかった。テレビで JOCV 関連番組を見て, 派遣隊
員の笑顔を魅力的に感じた。自分も派遣されたら何か
変わるのではないかと思興味を持つ。
- ・ 電気通信系の会社で AVC(オーディオ, ビジュアル, コンピュ
ーター)系の商品開発の研究職に従事していて, 自分から
動かなければ世界は変わらないと考えた。

【派遣中活動内容】

- ・ 学校での理数科指導, 施設の整備。シラバスに沿いな
がらも, 自由な発想を活かし, 授業や実験を実施した。
- ・ 研修(二本松訓練所)を受けていた時に英語での教授
法を習得し, 現地(タンザニア)では, 研修を活かし, 英
語で指導案を作成し, 現地研修会で活用した。
- ・ タンザニアの教育を良くするために, 教育関連分野の
隊員によるタンザニア教育研究会に所属し, 他の隊員
との意見や企画を交わし合い教育の質を高めた。
- ・ 米平和部隊(Peace Corps)と共同企画し, 生徒達の修
学旅行を企画運営し, キリマンジャロ山に連れていく。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 行動力がついた。タンザニアにいて自分がやらないと
変わらない, 生活出来ない現状に遭い, やらなければ
始まらない, やってみて考えようという考えに変化した。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 日本の学校と連携を考え JICA 大阪を通して文通活動
を行い, 手紙約 100 通を送るなどした。
- ・ 現地でホームページを作成し, 活動状況・生活状況, タ
ンザニアの教育事情, 文化などを発信した。

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1) 日々の授業の中で, 国語, 社会など
それぞれの教科に体験した話を折り混ぜている。(2) 外
国語活動や総合的な学習の時間において, 世界の情
勢, 国際協力の内容を含めている。(3) 黒板の上に世
界地図を設置するなどして, 児童が身近に世界を体験
できるような環境を作り, 道德活動に活かしている。
- ・ 学校(授業以外): (1) 外国語活動における ALT との調
整, 小中一貫英語教育の担当をしている。(2) 学校の
児童達に対し, DEAR(開発教育協会)および, 派遣前
隊員との連携による体験型の開発教育プログラムを行
っている。毎年, 6 年生へ, 世界へ羽ばたく日本人として,
青年海外協力隊の体験談を発表している。



写真: 物理の授業実践

【派遣中のボランティア活動】



写真: タンザニア教育研究会での教育実践研究

【派遣中のボランティア活動】



写真: 米平和部隊(Peace Corps)との連携による
児童生徒のキリマンジャロ登山への引率

【派遣中の還元・貢献活動】

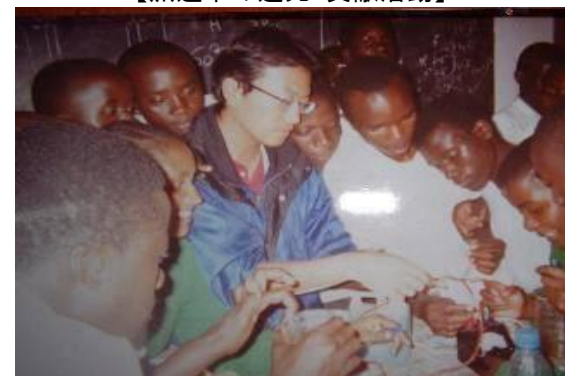


写真: レーザーポインターを活用した理科授業における
光の屈折実験【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-12(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:Y.Y.教諭(2/2)】
 (東京都町田市／町田市立南つくし野小学校／タンザニア派遣)

- 学校外: (1) 関東教育支援ネットワークという、学校の先生や教育に関心のある人々(教師以外の方も入会可)が語り合うコミュニティを創設。(2) 国際ボランティア・マガジン・クロスロードに執筆。(3) 福岡の FM ラジオ番組等に出演。(4) 幼小中高校、さらには大学や NPO や JICA など、150 回以上の講演を実施。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- 阻害要因: 帰国後も会社に所属していたが、日本の電気情報の進化が目覚しく、今までにやっていた業務内容がほとんど変わっており、もう一度勉強しなおすこととなった。
- 貢献要因: (1) 着任校の先生方が、国際協力の理解について非常に高く、新しいことへの挑戦に非常に好意的・協力的であった。(2) 関東教育支援ネットワークや JOCV 隊員などの交友関係が広いため、たくさんの知見を得ることが出来る。

【提案・要望】

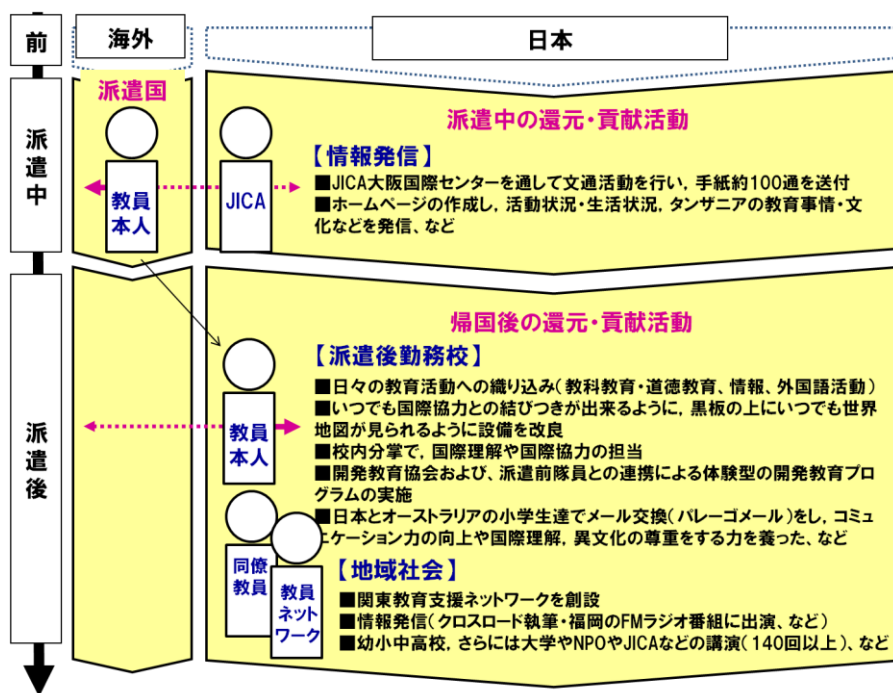
- 教材研究をする時間や学級運営を行う時間が圧倒的に足りない現状がある。教育の質の向上や学級の中で自分の力を発揮するために、事務処理をする人員の確保が必要である。教科書発注業務や集金の計算等の業務を事務員にしていきたい。
- 作業環境の充実が必要である。例えば、性能の良いパソコンや各個人使用の USB の配布が不可欠である。セキュリティーを通した個人パソコンの導入を認めて欲しい。
- 出張等に必要書類の手続きを簡略化し、関東教育支援ネットワークの参加者や協力隊参加教員が必要に応じて、臨機応変に他学校に行き来して、講演や出張授業ができる仕組みを作って欲しい。
- 他校の協力隊参加教員や興味のある教員と協力し、学校間で自由に行き来し、話し合い活動が出来る仕組みを作って欲しい。知識や想像力の向上、世界観をもつ人との交流が重要であると考えている。



写真: 開発教育協会(DEAR)と派遣前隊員(タンザニア派遣)と連携による開発教育プログラム(貿易ゲーム)の実施【帰国後の還元・貢献活動】



写真: 帰国隊員ネットワーク(関東教育支援ネットワーク)の形成と帰国後の実践事例の共有と議論【帰国後の還元・貢献活動】



【Y.Y.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-13:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:N.T.教諭(1/2)】
 (神奈川県逗子市/逗子市立沼間小学校/ジンバブエ派遣)

【概要】

- 経験教員:N.T.教諭
- 派遣国:ジンバブエ(平成13年度1次隊)
- 職種:養護教諭
- 還元・貢献活動キーワード:食育,給食指導,保護者参加型の授業実践,総合的学習の時間,学級間の交換授業
- 教育実践キーワード:児童生徒の個々に向き合う指導の重要性,一日一日の時間の大切さ,日々の教育活動に対する振り返りの重要性,授業の内容の融通性の向上
- 備考:派遣後教員に

【参加動機】

- ・ 短期大学時のサークルなどを通して途上国について興味を持つ。教員になりたいという強い思いがあった。子供が純粋にかわいいと思い,途上国の子供たちの教育に携わりたいと感じたから。
- ・ 青年海外協力隊については以前から知っていたが,具体的な参加方法については知らなかった。上司は理解を示していた。また,同僚からも参加した方がいいと勧められた。一次試験に合格していたので,そのまま選考を受けるべきと言われた。

【派遣中活動内容】

- ・ ジンバブエの小学校へ着任(プロジェクトの前任者なし)し,障害児に対して体育と音楽を教えていた。
- ・ 体育,音楽を教えた経験はなかったが,前任者不在だったため,とても感謝された。体育はサッカー,リレー,綱引きなど簡単に行える競技を中心に行った。肢体不自由の子供に音楽を教えているときは非常に苦労した。体育,音楽の授業が段階別に分かれていない。(障害ごとの段階が分かれていないので,教えるのにもとても苦労した。)人の手を借りなければ動けない子供たちに音楽療法などの教育方法を取り入れた。
- ・ ジンバブエ派遣後,フィジーに短期派遣で活動する。フィジーでは,養護隊員として音楽,体育,図工を教えていた。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 生徒個々人としっかりと意識的に向き合うようになった。
- ・ 伝えなくてはならないことをその日に伝えるようになった(ジンバブエでは,HIVなどの問題で子供が急に亡くなってしまったことがあった経験を踏まえて)
- ・ 一日を振り返り,授業など子供たちに出来ることはやりきったかを毎日考えるようになった。
- ・ 物事を噛み砕いて丁寧に教える重要性を,日本に帰国し教員を経験したことによって,改めて理解した。
- ・ なるべく多くの子供と接したいと感じるようになった(普通学級だけではなく養護学級にも)。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ なし



写真:ジンバブエでの体育を通した養護教育実践
 【派遣中のボランティア活動】



写真:ジンバブエでの体育を通した養護教育実践
 【派遣中のボランティア活動】



写真:フィジー(短期派遣:養護隊員)における
 図工のワークショップ風景
 【派遣中のボランティア活動】

【表 9-13(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:N.T.教諭(2/2)】
 (神奈川県逗子市/逗子市立沼間小学校/ジンバブエ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- 学校(授業): (1)3つの学級を対象に交換授業を行い、総合学習の授業で国際理解を教え、自分の経験を元に興味を持ったことに対して、調べ学習を行った。(2)食について、命に関わる給食指導の授業を行った。(3)学級活動として、協力隊としての活動を伝えるための保護者参加型の授業を行った。
- 学校(授業以外): 学校の授業以外にも、日本との比較対象として、「ジンバブエでは...」、「フィジーでは...」など日本との違いを話すことで協力隊での経験を活かそうと考えている。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- 阻害要因: 自分の経験を小学校の授業の中で話すのだが、担任が変わることによって教えたことは浸透していかない。また、新しいクラスの担任を受け持ち、自分の経験を交え授業を行っても、浸透するのに時間がかりすぎる。
- 貢献要因: (1)学校の授業以外にも、日本との比較対象として、「ジンバブエでは」、「フィジーでは」、など日本との違いを話すことで協力隊での経験が活かしている。(2)英語を隊員として2年間使ってきたので、授業中でも生徒の様子を見て外国語活動を行っている。児童生徒の変化を感じ取ることによって授業内容を自在に変えることができる。

【提案・要望】

- 派遣前隊員の気持ちの交流と派遣経験隊員の経験共有が不可欠



写真: 給食指導による食育実践
 【帰国後の還元・貢献活動】

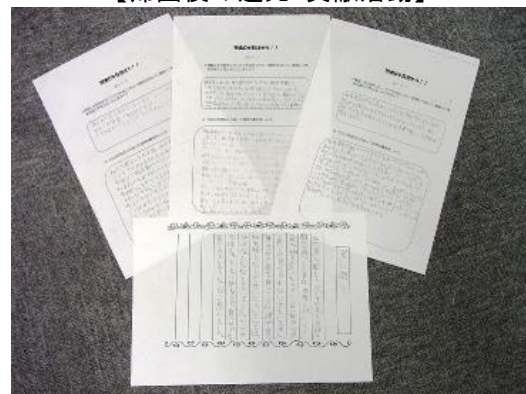
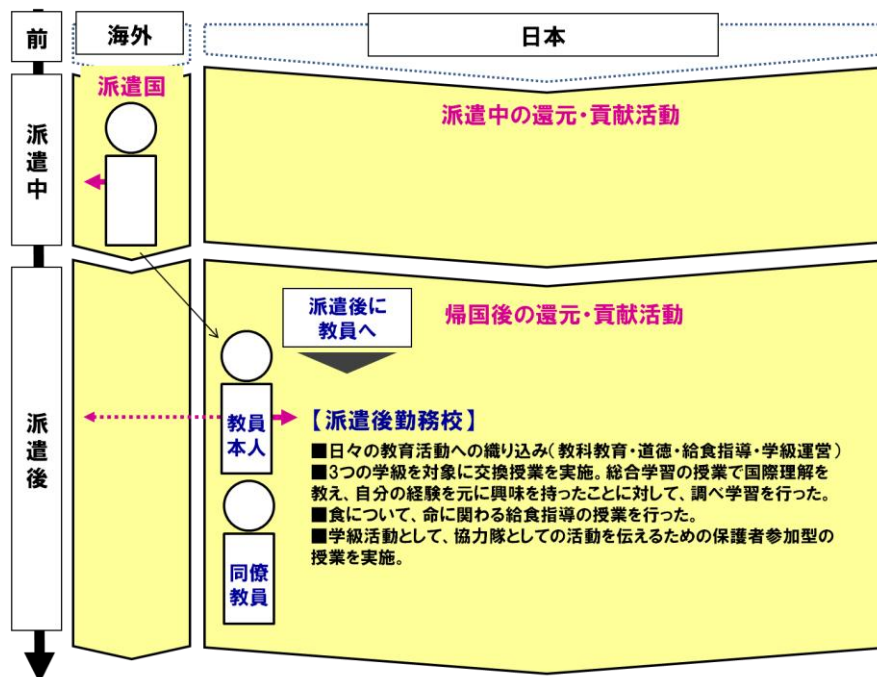


写真: 総合学習の時間における「食」に関する作文
 【帰国後の還元・貢献活動】



【N.T.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-14: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: K.H. 養護教諭 (1/2)】

(大阪府八尾市 / 大阪府立八尾支援学校 / ルーマニア派遣)

【概要】

- 経験教員: K.H. 教諭
- 派遣国: ルーマニア (平成 15 年度 1 次隊)
- 職種: ソーシャルワーカー
- 還元・貢献活動キーワード: 国際理解教育 / 開発教育, 保健関連機関との地域連携活動 (大東市たばこゼロプロジェクト), 社会教育活動 (ルーマニアからのほほえみ), 日常会話, 総合的学習の時間
- 教育実践キーワード: 仲間意識の醸成, 日本の教育制度の利点 (教育機会), 経験による言葉の重さ, 生きる力, 「あたりまえ」の概念, あいさつと日常会話の重要性, 健康と教育, 学び合い, 総合力を持つ教員の育成, 地域連携プロデュース

【参加動機】

- ・ 英語の勉強も兼ねて訪れた南アフリカでの人々との出会いは, その後の国際協力を志した直接的なきっかけとなる。養護教諭とし 7 年間の在職中 (中学校) に思春期に対する支援を学び, 国際協力への可能性を感じ, JOCV 参加。

【制度認識と対応】

- ・ 本制度の書類が学校に届いたと学校長から話があり, 第 1 号として派遣。もともと海外志向のあることを同僚が知っていたため, JICA の面接日には業務を代わってくれるなど, とても協力的だった。

【派遣中活動内容】

- ・ ルーマニア子供保護庁・コンスタンツァ市子供保護局で活動。子供保護局は, ストリートチルドレンの第一次収容施設としての機能を持つ。当該市の子供保護局は様々な地域から子どもが流入し保護数が増加していた。施設間のつながりが無いことに気づき, つないでいくことに自身の役割を定め, この役割に対し, 1, 2 カ月にイベントを開催で施設間連携を強化した。連携強化は, 集団内のスタッフ・子どもが仲間意識を持つうえでとても有益な活動であると, 派遣前の荒れた中学校で感じていたから。また仲間意識を持つことは, “心を育てる”ことにつながる, と確信をしていたから。イベントでは, 必ず“健康”“文化”“マナー”とテーマを決め, 教育的視点に留意した。イベントに必要な布, 雑貨などを地域の人々の協力によって得た。これが地域とのネットワークづくりにもなるとともに, ストリートチルドレンへの理解促進にもなった。

【派遣教員自身の変化】

- ・ “あたりまえ”はないという考えるようになったことが大きな変化。人は自然の中で共存し, たくましく毎日生きているということ, これが大切だと実感した。
- ・ 日本では全国の格差なく同じ教育レベルであり, 日本の教育制度の素晴らしさを感じた。
- ・ 派遣前, 人生を通して人のために何かをする 2 年間を持ちたいと考えていた。派遣後, 立場は異なっても互いに学び合うものであると感じるようになった。
- ・ 集団づくりという考え方は前任校で学び, 子どもたちは未来ある存在だと就職後に強く意識するようになった。



写真: 派遣地区における芸術週間での活動展開 (最終日撮影)

【派遣中のボランティア活動】



写真: 手作りの内臓取り外し可能なTシャツを用いてからだと健康についての学習風景

【派遣中のボランティア活動】



写真: クロスロード特集「日本の生徒たちへの手紙」において, ストリート・チルドレンとの出会いに関する記事の発信【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 異文化の中で, 周りの人々の助けなくして生きていくことはできないことや, 自分を受け入れてもらうために最初に行えることは「あいさつ」だということなどを, 実体験することで, 自分が子どもたちに言うことにリアリティがあること。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ (1) ニュースレターを送付したが, 教育プログラムまでは展開できず。(2) JICA「クロスロード」の「日本の生徒たちへの手紙 103」「路上で生活する子供たちに出会って」という記事を執筆し, 他校にも送付。

【表 9-14(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.H.養護教諭(2/2)】
 (大阪府八尾市／大阪府立八尾支援学校／ルーマニア派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業):「日々の子どもたちのとの会話」+「総合的学習の時間」などに体験から得たメッセージを盛り込んでいる。また社会科・道徳等で担当教諭とチームで授業をした。日々の会話からスタートだと思ふ。
- ・ 学校(授業以外):文化祭や地域教育協議会でのイベント企画,全校平和集会:「いきるせかいのこどもたち～ルーマニアのこどもたちにかかわって」(深野小学校)開催。
- ・ 学校外:(1)2005年8月1日～12日に写真展「ルーマニアからのほほえみ～青年海外協力隊のまなざしを通じて」(於:地域の生涯学習施設)開催。ルーマニアのストリートチルドレンのほほえみをテーマに紹介し,写真だけではわからない現実の子どもたちの様子についても説明。12日間で約400名以上が来場。会場ではルーマニアの民芸品や民族衣装なども展示。(2)2007年に「大東市たばこゼロプロジェクト」を実施。地域の保健関係機関や,PTAを巻き込んだ協働プロジェクトを行い,転勤後も継続。



写真:深野小学校の全校平和集会:
 「ルーマニアのこどもたちにかかわって」での経験報告と国際理解教育・開発教育プログラムの実施
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

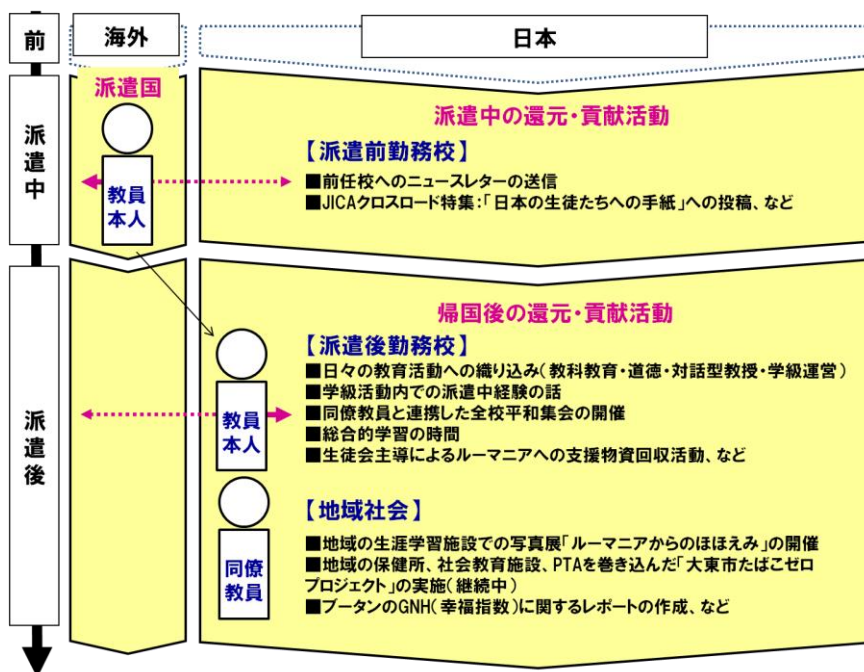
- ・ 阻害要因:(直接的な活動に対し)帰国後の年数の経過,勤務校の異動
- ・ 貢献要因:イベント活動を通じ実感した,すべての物事の下準備,組織力,毎日の小さな活動の積み重ね,自発的行動を引き出す人々が主役になれる”仕込み”などが,帰国後の活動にも生かされている。(企画・調整力)



写真:生徒会主催によるルーマニア
 への支援物資の回収活動
 【帰国後の還元・貢献活動】

【提案・要望】

- ・ (1)金銭や人事的問題は感じない。経験者を現場に派遣したほうがよい。一般派遣と現職派遣では意識が違い,現職派遣は責任もって還元・貢献していくことが求められるから。(2)総合力を持った教員を育てなければならない。(3)言葉だけではなく,子どもたちの10・20年後を見据え教育のできる教育者を育てなければならない。



【K.H.養護教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-15: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: K.M. 教諭 (1/2)】
 (兵庫県香美町／兵庫県香美町立柴山小学校／ホンジュラス派遣)

【概要】

- 経験教員: K.M. 教頭 (兵庫県香美町)
- 派遣国: ホンジュラス (昭和 63 年度 3 次隊)
- 職種: 技術科教師
- 還元・貢献活動キーワード: 教科教育 (技術), ふるさと学習, 自然体験を通じた感動体験, ICT を活用した国際理解・開発教育, 「幸せ」に関する道徳教育, 教育指導力向上研究会, 教育支援ネットワーク, 学校運営, JOCV グリーティングカードから始める JOCV 派遣教員と地元学校との交流プログラム
- 教育実践キーワード: ふるさと教育, 教育の国際化, 「豊かさ」の概念, 生きる力, 日本の子どもが世界の子ども繋がる意味, 感動体験, 自分で気づく力を養う
- 備考: 制度以前参加

【参加動機】

- ・ 学生のころから国際協力に興味があり, いつかは実現したいと思っていた。大学卒業後, 教員になって香港の日本人学校で 3 年間教える機会に恵まれたものの, 現地の日本人学校は日本以上に日本らしかった。このような背景から, 帰国後 3 年の後, 派遣隊員に参加。

【派遣中活動内容】

- ・ 語学力 (スペイン語) の面で大変苦勞し, まともに仕事ができるようになったのは最後の半年間くらいだった。技術教師だったので, 現地では主にモノづくりが活動。図画工作でやる“動くおもちゃ”づくりをやっていこうと決めた。そして, 簡単な道具 (ハサミとのり) のみでできることをやった。この“動くおもちゃ”づくりを教材として, (1) 小学校教員養成校の学生に対する授業, (2) フティカルパ市周辺小学校の先生方を対象にした講習会, (3) 全国に 12 校ある小学校教員養成校, 技術科教師集団の組織づくり及び講習会, (4) 長期休暇を利用した無免許教師への授業, 及び首都の教育大学における講習会, を実施。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 教育をどうするのかということよりも, 生き方とか, 何が大事なことかということを学んだ。兵庫県浜坂, つまり一地方の片田舎のこどもたちは, 東京に対して劣等感を持ち, 自分たちを卑下する傾向が強く, 多かれ少なかれ東京に対するあこがれを持っている。一方, ホンジュラスの人々は, 自分たちの home town に誇りをもって語ることができる。このホンジュラスの人々に出会い, 東京への劣等感を抱かせていたのは, ほかならぬ自分たち教育者だったのではないかということに気がついた。そして, 帰国後は, 自分たちの故郷である浜坂を誇りに思う子どもを育てなければならない, ふるさとをきちんと伝える先生にならなければならないと思った。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 派遣当時, ICT は普及していなかったし, 総合的学習の時間はなかったため, 手紙を送ることくらいしかできなかった。



写真: 小学校先生を対象とした講習会
 【派遣中のボランティア活動】

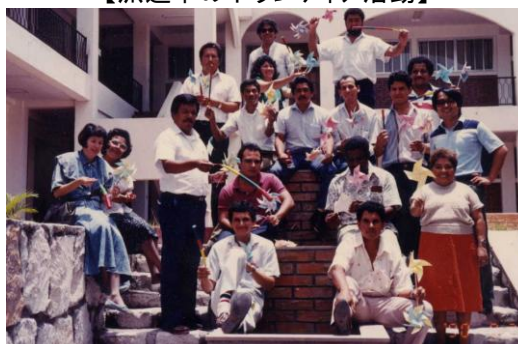


写真: 技術科教師講習会
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 「動くおもちゃ」の教材作りの実演風景
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 兎塚小学校 6 年総合的な学習の時間
 「ひとりひとり世界の友だち」での, ホンジュラス国とのテレビ会議交流【帰国後の還元・貢献活動】

【表 9-15(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.M.教諭(2/2)】
 (兵庫県香美町／兵庫県香美町立柴山小学校／ホンジュラス派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)ふるさと教育の実践,「自然体験プログラム」(感動体験)。(2)教室内のパソコンを活用し,インターネットを活用して,海外からリアルタイムで届く隊員からのEメールを開き,子どもたちが現地の人々や子どもとつながる実践:「ひとりひとり 世界の友だち」。
- ・ 学校外: (1)学校におけるさまざまな授業活動による還元・貢献を但馬国際教育研修会や教育課程編成講座「多文化共生」など教員研究会の場で報告。(2)研究会での報告などの場では常に連絡先を公開し,つながりをつくることを呼びかけた。(3)県教育委員会に,「教員指導力向上研究グループ(旧自主研究グループ)」の設立を申請し認可される。(4)2006年に兵庫OV教員研究会設立,運営(年3回の研究会実施),兵庫県内の小・中・高校のJOCV海外教育経験教員が中心となって組織し,「教育の国際化」のために立ち上げる。(5)JICA OV会グリーティングカードプロジェクト:グリーティングカードにメッセージを入れて送ると半数は返事が返ってくるので,それを教材としてスタートする。



写真: 授業実践とその成果をまとめ,さまざまな研究会の場で報告
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

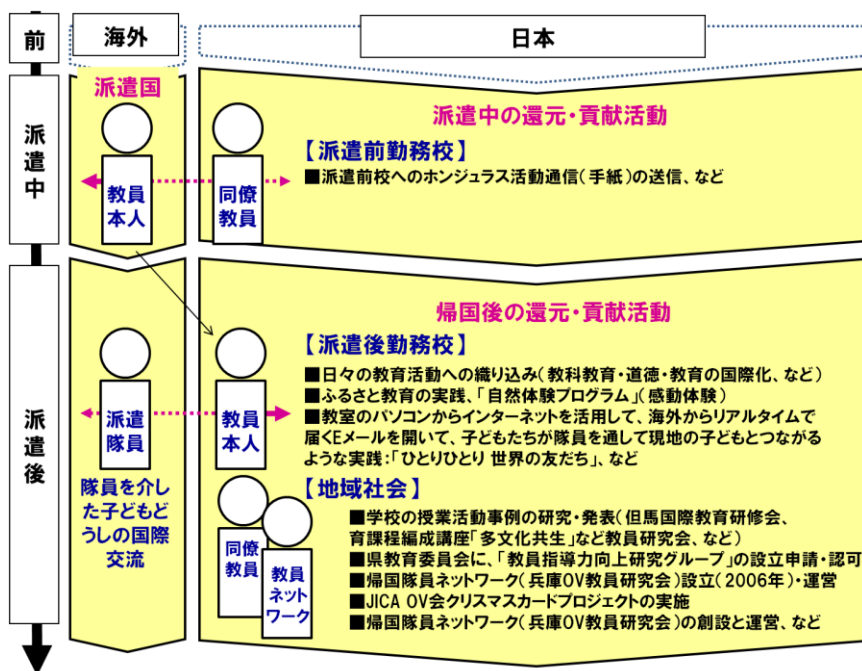
- ・ 阻害要因:JOCV 派遣教員の数が少なく,途上国経験を教育現場で生かす場がない。
- ・ 貢献要因:ICTの発達とその活用により,同様の経験をし,教育現場での還元・貢献に関して考えている人々とつながるネットワークのベースをつくっていった。



写真: 帰国隊員ネットワーク(兵庫OV教員研究会)の創設と帰国後の実践事例の共有と議論
 【帰国後の還元・貢献活動】

【提案・要望】

- ・ 教育の現場は多忙で時間的にも精神的にも余裕がないのが現状。教育の現場が,先生の視野と活動を海外に拡大していくような仕組みや風土になっていない。
- ・ 「青年海外体験隊(帰国後の還元・貢献活動を主)」と「青年海外協力隊(派遣国での技術協力を主)」とに渡航目的を明確化することで,より一層,有益なプログラムができるのではないかと。



【K.M.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-16:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:J.K.教諭(1/2)】
 (大阪府豊中市／大阪府豊中市立上野小校／ベトナム派遣)

【概要】

- 経験教員:J.K.教諭(大阪市豊中市)
- 派遣国:ベトナム(平成 12 年度 2 次隊)
- 職種:SE
- 還元・貢献活動キーワード:派遣中における日本の高校との連携による国際理解教育/開発教育(Meet the GLOBE プロジェクト), 総合的学習の時間, 人権教育(バリアフリー, 私たちの幸せ), NGO 連携の教材支援活動, 持続発展教育
- 教育実践キーワード:人のつながりの大切さ, 人権教育・国際教育を通じた価値教育, 既存の教育実践との関連づけ(つながり・かかわり・ふかまり・ひろがり), 「幸せ」の概念
- 備考:派遣後教員へ

【参加動機】

- ・ 大学時代に, 登山家でもあった中学時代の恩師から世界中の山の話の話を聴いて, 世界に対するあこがれを持っていた。また恩師の関係者が元協力隊員で, 大阪 OV であり, ゼミの担当教授も元協力隊員であったことがきっかけとなった。大学卒業後, 民間のコンピュータ会社で働き, 専門技術を身に付けたのち JOCV に参加。

【派遣中活動内容】

- ・ ホーチミン市総合科学図書館での書籍情報の電子化, Word Windows の講習会, ホームページの作成, 図書館職員履歴管理データベースの作成, パソコンの保守管理など。

【派遣教員自身の変化】

- ・ いろいろなトラブルに見舞われながらも, 人々に助けられながらやってきた。この経験を通じて人のつながり, 人の輪の大切さを実感。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 現地でお世話になったベトナム語の先生のおかげで親しい友人ができ, 人のつながりが広がってネットワークができた。この現地の人々とのつながりのおかげで現地 NGO 活動(孤児院支援)に参加した。また大学の恩師とのつながりから MTG(Meet the GLOBE プロジェクト: 2000 年より関西大学が中心となった ICT 利用の異文化理解交流プロジェクト)で, 国際理解教育プログラムへの参加。

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1) 帰国後, 青年海外協力協会近畿支部の勤務を通して, 教育に関心を持ち, 教員免許を取得。教員としての仕事の現場で, 日ごろの授業や子供たちとの触れ合いの中でベトナムの経験がとても生きている。(2) 6 年生の総合的な学習の時間に, 国際協力がテーマとなった際, ベトナムについて授業を実施。(3) 現在, 担当をしている 3 年生対象の授業では, 「やさしい町上野」と題してバリアフリーをテーマに授業。(4) 「ハンディキャップは不幸なことか?」「幸せって何?」と問いかけることを通じ, こどもたちがそれぞれ生き方を再考していく中で, 児童から「うまれてきてほんとうによかった」との言葉もあった。様々な授業実践を通して, 「自分の幸せ」から「私たちの幸せ」を考えていくということがねらい。



写真:ホーチミン市総合科学図書館の同僚と
【派遣中のボランティア活動】



写真:大阪広報誌を活用した派遣先図書館での
ボランティア活動の報告【派遣中のボランティア活動】

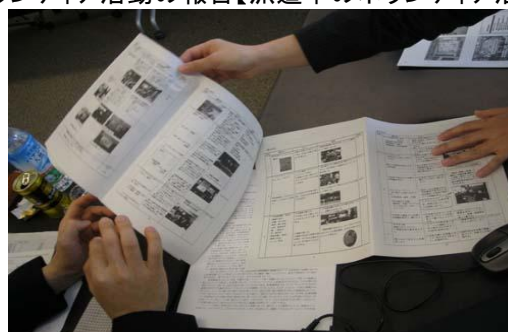


写真:豊中市立上野小学校の国際教育方針との連携
「国際社会に通用する学力を求めて広い視野と主体的行動力の育成」【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業以外): (1) 児童会の担当になった時, 「アルミ缶の回収と絵本を届ける運動～私の幸せから私たちの幸せへ～」(2008 年度から)という取組をスタート。アルミ缶を回収するとお金になり, 車がもらえるので, その車を社会福祉協議会に寄贈しようということでスタートしたが, やがて, そのお金の使い道子供たち自身が考えることで活動が広がった。(2) 子供によるアイデアで, 「シャンティ」という国際ボランティア組織を通じた絵本寄贈活動に参加。(3) その後, カンボジアの学校に直接絵本を贈ることで, 絵手紙やビデオレターの交換など, 直接的な子供たちの交流が可能になった。(4) 現在, 「アルミ缶の回収と絵本を届ける運動」は, 他にカンボジア教育支援基金 KEAF Japan(キープ・ジャパン)を通じて実施。

【表 9-16(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:J.K.教諭(2/2)】
 (大阪府豊中市／大阪府豊中市立上野小校／ベトナム派遣)

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ **貢献要因:**もともと豊中市は国際教育をおこなう土壌が深耕されてきた地域であり、ESD も昔から実践されてきた地域。これまでの教育の積み重ねの中で人権教育など色々な切り口から ESD 実践が試みられてきた。ESD が特別視されている中で、豊中では構えることなくこれまでやってきたことをこれからもやっていけばよいのではないだろうか。この蓄積と豊中の土壌は、今後ますます国際協力に関する活動を行う上でとてもよいものだと思う。

【提案・要望】

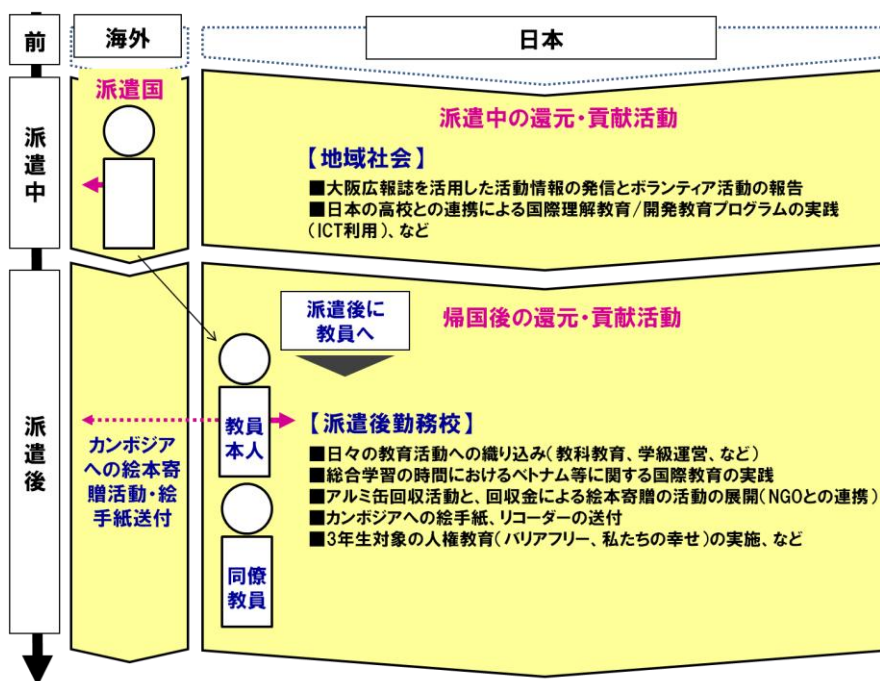
- ・ 現地に入った時、隊員は一人で活動することが多いが、同様の目的を持った NGO や他のプロジェクトとかかわり、互いの特性を生かしながらもっと連携することが可能になったらさらに幅広く活動できる。
- ・ また、他員が現地に派遣されている最中に日本の学校とつながる機会が増えれば良いのではないだろうか。日本でも海外とつながったりしたいと思っているにもかかわらず、互いのマッチングがない。



写真:空缶を売ったお金でカンボジアへ絵本を送る活動(豊中市立上野小学校)
 【帰国後の還元・貢献活動】



写真:カンボジアへの絵手紙の送付(豊中市立上野小学校)
 【帰国後の還元・貢献活動】



【J.K.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-17: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: M.S.教諭(1/2)】
 (新潟県新潟市／新潟大学教育学部附属新潟小学校／ドミニカ共和国派遣)

【概要】

- 経験教員: M.S.教諭
- 派遣国: ドミニカ共和国(平成 18 年度 1 次隊)
- 職種: 小学校教諭
- 還元・貢献活動キーワード: 外国語教育, 国際理解教育, 北京師範大学実験小学校との連携プログラム
- 教育実践キーワード: コミュニケーション手段としての英語, 日本語教育の重要性, 日本文化の尊重, 世界に対する好奇心の醸成

【参加動機】

- ・ 学生時代に途上国に旅行をしていて, 途上国の現状を知り国際協力がしたいと思っていた。その後, 日本で小学校教員を四年間経験した。そのノウハウを, 日本で活かすだけでなく海外でも活かしたいと感じたため。

【制度認識と対応】

- ・ たまたま自分でチラシを見つけた。学年主任に相談をしたところ, 「良い経験だから行ってきな」と学年主任から言ってもらえた。学校長は翌年退職であったが, 新校長への引き継ぎ伝達を行ってくれた。

【派遣中活動内容】

- ・ 1-4 年生の教師への指導。①マイ時間の学習プリントの作成, ②教師用指導参考ガイドの作成, ③算数指導のシステム化にむけた学年会(講習会)の実施, ④教材教具の開発と管理, 派遣同僚教員との連携による算数指導の講習会など。児童用教科書・教材, 教師用指導教材がない中で, 教師達の指導の質を高めるよう心がけた。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 「許す」と言う事を考える。すなわち相手の状況を考える事によって, 自分が見方を変え, 対応の方法を変えていく。
- ・ 自分で物事を魅力あるものにしていくという事。
- ・ 言葉・言語以外での「コミュニケーション」の重要性。
- ・ 日本の教育の良さがだけでなく, 文化・伝統の良さがわかった。日本文化の大切さ・日本語教育の重要性
- ・ どの国でも教師の子どもたちへの愛情は日本と変わらないという共有認識が持てたこと。
- ・ 自分の世界観の拡大。自分のもっている従来の世界を破らないと, 広いもの見方はできない。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 佐渡市立両津小学校の同僚教員と連携し, 異文化での生活をまとめた DVD を送った。子どもたちはその DVD を観て感想文を書き, 異文化での生活について話し合い, 考えを交流させた。その後, ドミニカに送付をしてもらい, 子どもたちがどのような所に興味・関心を持つのかということがわかった。



写真: 算数指導のシステム化にむけた学年会(講習会)の実施【派遣中のボランティア活動】



写真: 算数指導のシステム化にむけた教師用指導参考ガイドの作成【派遣中のボランティア活動】



写真: 算数指導のシステム化にむけた教材教具の開発と管理【派遣中のボランティア活動】



写真: 派遣校同僚教員との連携による算数指導【派遣中のボランティア活動】

【表 9-17(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:M.S.教諭(2/2)】
 (新潟県新潟市／新潟大学附属新潟小学校／ドミニカ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業):「外国語活動」を通して、海外事例を紹介しながら、英語を学びたいと思う「機会」を持たせている。外国語活動では、世界に対する好奇心を醸成させ、異なる言語を話す人々とも、コミュニケーションをはかろうとする態度の育成が重要で、アルファベットを学ぶことが目的ではない。あくまでも英語は目的ではなく、コミュニケーションの手段。異文化理解は、文化の相違を理解することだけではなく、日本との共通点を見出すことが小学校段階では特に重要。
- ・ 学校(授業以外):北京師範大学実験小学校との組織連携による児童生徒及び教員の交流活動。
- ・ 学校外:要請があれば応えるが、自主的には出来ない状況。



写真:小学校 5-6 年対象の外国語活動の実践
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

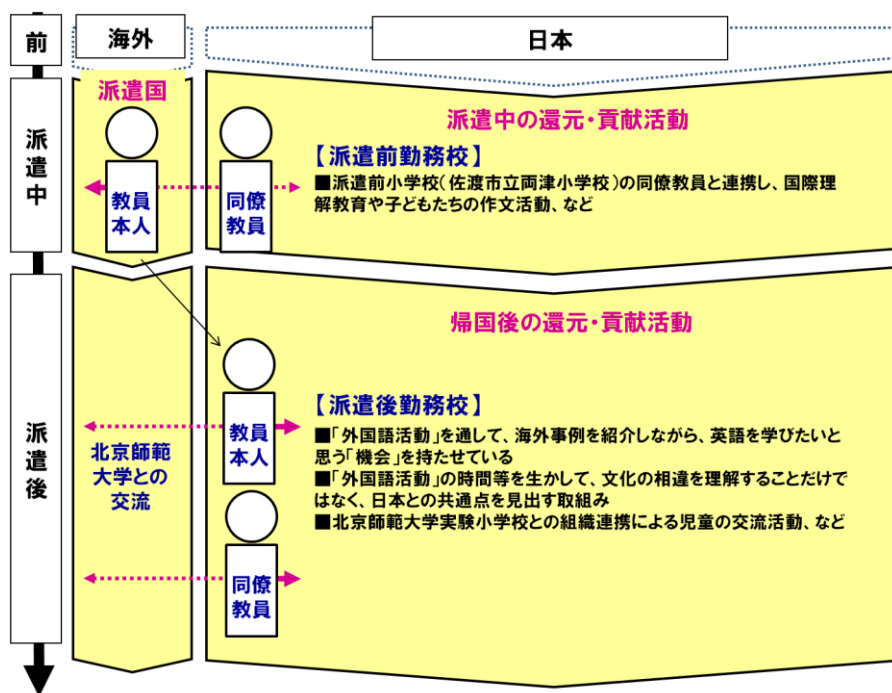
- ・ 阻害要因:必ずしも帰国教員が経験を活かせる職務に携わるわけではないということ。また、自分の経験は時間とともに薄れていくものも少なくないが、自身の経験をブラッシュ・アップしていくような機会もないこと。
- ・ 貢献要因:派遣前の 5 年間の教育経験

【提案・要望】

- ・ 管理職が本人にどのように還元・貢献活動を行いたいのか、十分なヒアリングを行うことが望ましい。
- ・ 文部科学省や教育委員会による、JOCV 海外教育経験教員の活用に向けた強いリーダーシップ
- ・ 帰国後、文部科学省あるいは教育委員会主導による、JOCV 海外教育経験教員の還元・貢献活動の報告会を年に 1 度実施し、経験者のブラッシュ・アップを図るとともに、派遣希望者への宣伝活動をする。



写真:北京師範大学実験小学校との組織連携による児童生徒の交流活動
 【帰国後の還元・貢献活動】



【M.S.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-18: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: N.I. 教諭(1/2)】
 (京都府京都市/京都市立大宅中学校/ジンバブエ派遣)

【概要】

- 経験教員: N.I. 教諭
- 派遣国: ジンバブエ(平成 6 年度 2 次隊)
ジンバブエ(平成 9 年度短期派遣)
- 職種: 体育教師(平成 6 年度 1 次隊)
青少年活動(平成 9 年度短期派遣)
- 還元・貢献活動キーワード: 生徒指導, 道徳, 保健での衛生・健康指導, 部活動指導, 京都府連携による普及啓発
- 教育実践キーワード: 「豊かさ」「幸せ」の価値観, 家庭や社会が育てる子どもたち, 心のゆとり, 日常会話, 経験・挑戦の大切さ
- 備考: 制度以前参加, 「京都市表彰」受賞, 京都市国際貢献枠で教諭として採用に

【参加動機】

- ・ アフリカ初の野球派遣隊員の村井洋介氏(母国のメンバーによるナショナルチームの構成に取り組んだ人, 現地で新たに野球要請 10 名を呼び寄せに貢献)の現地での活躍の新聞記事を読んで感銘を受けた。

【派遣中活動内容】

- ・ 着任当時, 周囲の黒人居住区の小中高校の巡回を始めて, 貧困の現状を知る。そして, 地域のストリートチルドレンと交流し, 生活保護などの活動も行った。
- ・ 高校において野球の普及につとめ, 全国大会参戦。2 度目に 3 位入賞。3 年目に後任者が優勝へ導き, メンバーから 3 名ナショナルチームに選ばれた。また, 現地の人たちの性格も考え, ソフトボールの導入も行った。
- ・ 黒人居住区に住む 17 歳~24 歳の青年対象に柔道クラブを作る。18 歳の部で 1 名, 首都の大会で 3 位入賞。
- ・ 柔道クラブの選手と共に養鶏所をつくり, 50 匹の鶏を飼育。それを販売してクラブの運営費に活用。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 日本と途上国の両方を体験して, 日本は多くの情報に振り回されていることに気がついた。また, 時間のゆとりが, 心豊かな人間社会をつくり出していると感じられるようになった。物が溢れ経済的に豊かな国と, 物が無く経済的に貧しい国が求める「幸せ」の違いを考える。
- ・ 初心者が野球をできるようにすることも, うまい人が上達することも, 野球だと感じられるようになった。
- ・ 現地に行って, 子どもはみな同じだと実感するようになった。問題ある生徒は, 様々な家庭環境や社会環境に問題があるのであって, 生徒自身が悪いとは言えない。経験を通して良いと思うことはきちんと伝えるということ大切に指導に当たれるようになった。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 日本の協力者に手紙を書き, 柔道着や野球道具などを回収・寄贈。(京都府警察学校, 内山タクシー, 明徳商業高等学校ソフトボール部, 府庁職員の協力。)
- ・ また, 「KYOTO グローバルユース緑と文化の海外通信」に, 用具の寄付活動に対するお礼や現地の様子を寄稿。(平成 4 年, 京都府は, 京都府出身の隊員を「青年海外緑と文化の大使」として委嘱し, 京都府と開発途上国との「架け橋」として活躍してもらう事業をスタート。この事業の一環として発行されている。)



写真: 黒人居住区で指導していた野球チームが首都大会へ参戦し勝利を収めた瞬間(ユニフォームは愛知県少年野球チームが寄贈)【派遣中のボランティア活動】



写真: 帰国後, 指導していた野球チームの活躍が新聞に載る【派遣中のボランティア活動】



写真: 短期派遣中 23 校の小中学校を定期的に巡回。初心者向け野球教室開催から大会企画開催。【派遣中のボランティア活動】



写真: 「京都府グローバルユース緑と文化の海外通信」に現地での様子を寄稿【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-18(つづき) : JOCV 海外教育経験教員の取組事例 : N.I. 教諭 (2/2)】
 (京都府京都市 / 京都市立大宅中学校 / ジンバブエ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- 学校(授業) : (1)「保健」の授業での、マラリアやエイズなどについて、現地の様子を交えての話。(2)「道徳」の時間などに、衣食住、教育、医療など恵まれない環境下で逞しく生きる途上国の子供たちのことを話しながら、“生きる”ってどういう事なのかを考える。DVD「もし世界が 100 人の村だったら」などの途上国の子供たちの生活を放映し、体験談と関連づけて、生徒が“何を感じ、何を思うのか”を大切にしている。
- 学校(授業以外) : (1) 何事も自分の目で見て、経験し、感じて、自分の生き方に活かして欲しい。(2) 経験は、失敗、成功に関係なく、全てが自身の財産になるはず。何事にも恐れず果敢に挑戦して欲しい。(3) 日本には貧富の差がないため、皆平等に無限のチャンスがある。何事も自分次第、人に頼ることなく、自分で自らの人生を切り拓いて欲しい。(4) 夢・信念を持って、努力し続けることで、必ず夢は実現すると信じて頑張ってください、と話す。
- 学校外 : (1) 地域の「家庭学習」の機会に授業開催を依頼されて現地体験を伝えた。(2) ジンバブエの野球振興・交流を応援する会「ジンバブエ野球会」の支援。(3) ニュースレター「ジンバブエの風」への寄稿など。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- 阻害要因 : 日本には、気持ちが暗くなるようなニュースを取り上げる傾向が強い。精神的に成長段階にある子供たちにとって悪い影響をもたらすのでは。
- 貢献要因 : 帰国後は講師だったが、後に教員採用の国際貢献枠ができ、教諭として採用された。

【提案・要望】

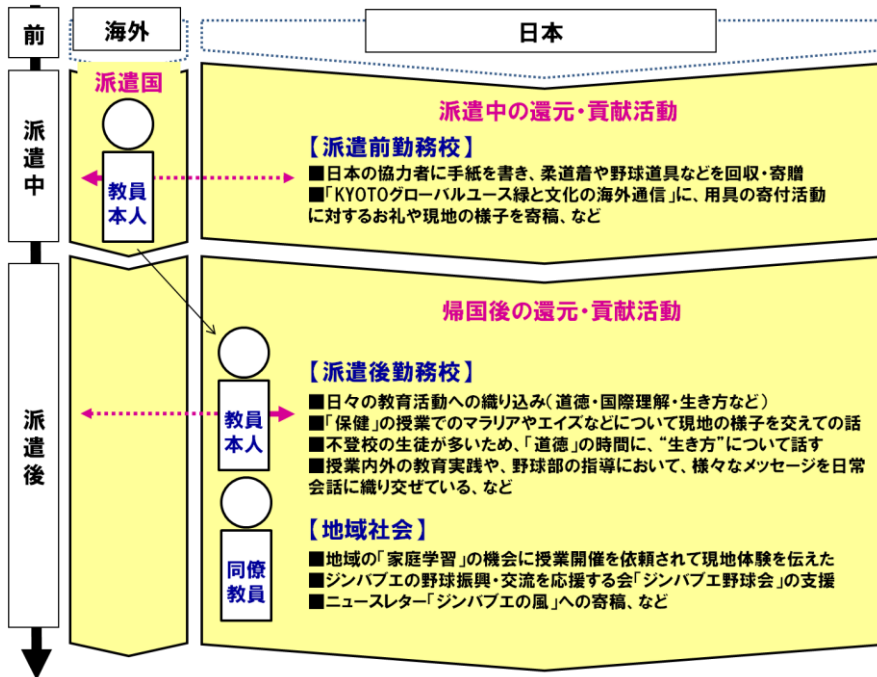
- 何らかのボランティアをやりたいという人は意外に多いのではないかと思います。何かの“きっかけ”が重要で、そのきっかけづくりとして、経験者が経験して感じた事などを発信していく事は大切かと思う。「百聞は一見に如かず」感性豊かな子供たちを実際に途上国に連れて行けるような制度や機会が増えると良いのではないかと。人生の価値観が変わる貴重な経験となるはず。



写真 : 生徒たちが各自書いた個人目標や自己アピールなどを定期的にクラス掲示
 【帰国後の還元・貢献活動】



写真 : 「ジンバブエ野球会」のニュースレター「ジンバブエの風」で活動支援を呼びかける。
 元関西学院大学附属高校野球部監督の伊藤益郎氏の呼びかけにより、首都ハラレに野球場が設立。同時に「ジンバブエ野球会」が発足し、支援活動始まる。
 【帰国後の還元・貢献活動】



【N.I. 教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-19: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: K.F. 教諭 (1/2)】

(京都府京都市 / 京都市立堀川高校 / ジブティ派遣)

【概要】

- 経験教員: K.F. 教諭
- 派遣国: ジブティ (平成 12 年度 1 次隊)
- 職種: 陸上競技
- 還元・貢献活動キーワード: バランス感覚を重視した生徒指導, 日々の教育実践への直接的・間接的な経験の織り込み, 陸上部指導
- 教育実践キーワード: コミュニケーション力の幅の拡大, 志の大切さ, 言葉の大切さ, 新しい視点を生み出す手段としての外国語, 経験の活かし方の匙加減, バランス感覚, 体当たりの指導, 問題解決に向けた臨機応変な対応, 異文化対応
- 備考: 制度以前参加, 「京都市表彰」受賞, 京都市国際貢献枠で教諭として採用に

【参加動機】

- ・ 出版業界で勤務 3 年が過ぎたころ, 立ち寄った「協力隊フェア」でスポーツ要請があることを知り, 情報収集を始め「クロスロード」に出会った。その後, 職場を退職して参加。もともと人の成長や変化などにかかわることに興味があり, 学生時代に教職は取得していた。協力隊派遣後に教員となる。

【派遣中活動内容】

- ・ 陸上競技のコーチとしてナショナルチームの選手を指導。世界陸上パリ大会等にコーチとして引率。
- ・ ジブティ陸連の組織運営。「国内選手権」は, 施設も資金も不足しており, 運営もかなり杜撰であった。陸上競技の指導のみならず, 試合運営や, 記録管理などの基礎づくりに尽力。コーチや職員がつぎつぎと亡命するという状況下で, ジブティ陸連は指導者不足が深刻であり, コーチ養成講習会なども開催。フランス人講師とともに指導にあたる。

【派遣教員自身の変化】

- ・ “コミュニケーション能力の幅の拡大”。現地では, およそ世の中で起こりうる大抵のことを経験したため, 様々な場面で問題解決に向けた, 臨機応変な対応力が身に付いた。つまり, 自分自身の“引き出し”のバリエーションが拡大した。特に異文化に起因する価値観の相違からくる諸問題への対応能力を体得できた。日本社会において, これらの“引き出し”の多さをアピールせず, 必要な時にだけ引き出すような配慮にも心がけている。
- ・ スポーツを通じた人間形成の可能性を強く認識するとともに, 教育の大切さを, 身をもって経験した。
- ・ “サムライ魂”, 換言すれば“志”を堅持することの大切さを生徒たちに伝えられること。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 会社員の時, 社外の活動として所属していた陸上競技の「クラブチーム」(川崎市)に, 現地の様子に関する原稿「東アフリカ・ジブティ共和国より」を執筆。「クラブチーム」に送った原稿がきっかけとなり, 日本の古いシューズや衣類がジブティに送られてきた。
- ・ そのほか, 「ジブティ国際ハーフマラソン」に日本人選手 1 名を招聘。「長野マラソン」にジブティ人の招待選手を連れて日本に行くなど。



写真: フランス人講師とともにコーチ養成講習会の開催
【派遣中のボランティア活動】



写真: エチオピア遠征
【派遣中のボランティア活動】



写真: 世界陸上パリ大会への参加
【派遣中のボランティア活動】

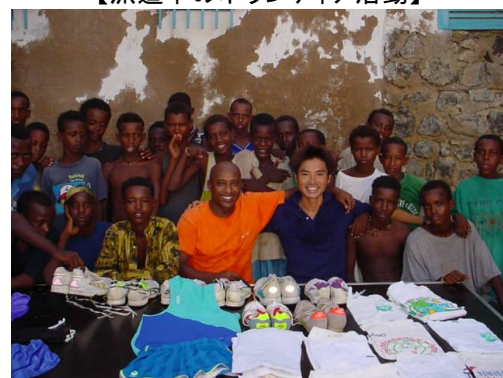


写真: 陸上競技クラブチームと連携したシューズなどスポーツ用具の寄付活動
【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-19(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:K.F.教諭(2/2)】
 (京都府京都市／京都市立堀川高校／ジブティ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ **学校(授業):** (1) 国語教員として、海外経験を直接語ることは少ない。例えば、現代文の授業時、思想領域の題材において、文化的な背景など現地体験があつてこそ理解できることを語るようにしている。(2) 母国語以外の言葉を習得することで、新たな視点を身につけることができるといった話を、経験に基づいて語れるようになった。(3) 授業の雰囲気や状況に応じて臨機応変に、経験の活かし方の匙加減をしている。
- ・ **学校(授業以外):** (1) 京都府教員(帰国直後は京都府採用、その後、京都市の国際貢献枠採用の第1号に)の時には、「総合的な学習の時間」で話をした。(2) 陸上部顧問として、部活動を通じての生徒指導にも尽力。陸上部指導時は学業を奨励し、教室では文武両道を奨励するなど、バランス感覚を大切にしている。
- ・ **学校外:** (1) 国際交流協会や小学校の国際理解教育の場で話をすることもあつたが、日常忙しく断らざるを得ないことが多い。(2) クロスロードへの寄稿



写真: 堀川高校陸上部での指導風景
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

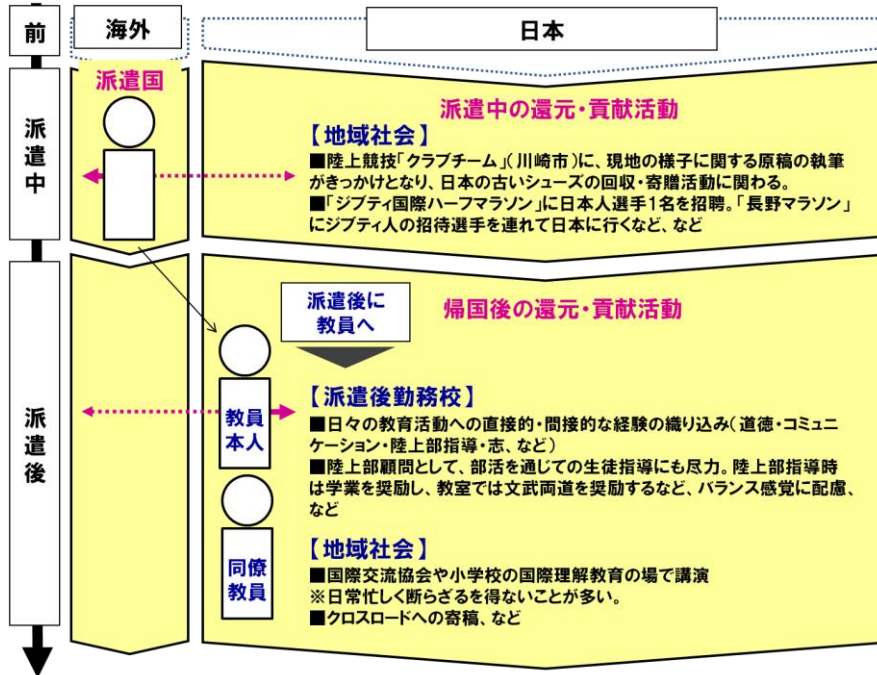
- ・ **貢献要因:** (1) 現地では、麻薬に手を出した選手に、身体を張って止める指導を行うこともあつた。この“体当たり”の指導は、帰国後日本で教師となつた後、生徒指導においても役立った。(2) 堀川高校はパイロット校(スーパーサイエンスハイスクールの第1期指定校)であり、新しいことにチャレンジしやすい風土がある(堀川高校企画部の仕事として携わる、講演会運営など)。



写真: 堀川高校企画部開催のコミュニティ・カレッジ
 【帰国後の還元・貢献活動】

【提案・要望】

- ・ 派遣現職教員を増やすことが、グローバルな視野で活躍する人材を育てることに必ずしもつながるとは考えてはいない。派遣隊員の選考段階で、バランス感覚を持った人材を選んでいくことが大切だと考える。(現職教員を派遣するならば、協力隊経験を相対化できる者を選考することが、より重要であると考え。)



【K.F.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-20: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: H.U. 教諭 (1/2)】

(兵庫県芦屋市／芦屋市潮見幼稚園／ミクロネシア派遣)

【概要】

- 経験教員: H.U. 教諭
- 派遣国: ミクロネシア (平成 18 年度 1 次隊)
- 職種: 幼児教育
- 還元・貢献活動キーワード: 国旗かるとや国旗の絵本を生かした国際理解教育, 歌を通し様々な世界の言葉との出会い
- 教育実践キーワード: 総合プロデュース力, コーディネート力, 家族の大切さ, おおらかさ, マイノリティ経験を生かした外国籍児童・保護者対応, 身近ところからグローバルな世界観を

【参加動機】

- ・ 小中学生時のボーイスカウト, 高校時のキャンプ・リーダーなどの経験を通じ, 幼児教育の道を選ぶ。仕事の傍ら, 阪神・淡路大震災で被災した子どものメンタルケアや, 芦屋市国際協力協会によるフィリピン・ピナツボ火山噴火被害の復興支援活動にも積極的に参加。帰国後もフィリピンスクールプロジェクトを立ち上げ, 毎年夏休みには現地へ訪問。これらの経験から, 自分自身のファシリテーターとしての力, 幼児教育の専門性を活かしていきたいという気持ちが制度参加につながる。

【制度認識と対応】

- ・ 幼稚園の現場は, ただでさえ忙しい状況であったが, 園長先生の理解と, 好意的な対応 (試験日が終業式と重なったが休暇取得にて受験などの配慮) を得られた。

【派遣中活動内容】

- ・ 現地の幼稚園は, 就学前教育の色が強く, 遊びながら学ぶという考え方がなかった。そこで, 文化的な背景や人々の性格などをふまえて, 少しずつ実践によって伝えていった。また, 現地の人々は, 知識をただ暗記する学び方をしていたが, 実際に生活の場にある具体的なものを使って, 楽しくわかりやすく学ぶことを実践した。
- ・ カウンターパートと一緒にハワイで行われた北太平洋諸国の「教育会議」にて発表。他国の教育事情を知るとともに, 自分の授業の有効性をポンペイの人達に知ってもらい, カウンターパートと信頼関係を深めた。またミクロネシア初の幼稚園の公開授業を町で行った。
- ・ “個人プレー”をやめ, “総合プロデュース力”を意識し, 隊員が協力して活躍できる場づくりをおこなった。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 日本にはない南の人々の素晴らしさ (家族を大切にす文化や, 物事をおおらかに包み込む文化, 懐深く人を受け入れる文化) に触れ, 帰国後, 家族をいたわり, ひとびとのつながりを大切にするようになった。
- ・ 教材開発など, 日本の教育の素晴らしさに気付いた。
- ・ 派遣経験により得た, “ものごとをコーディネートしていく力”, “総合的なプロデュース力”, そして“おおらかさ”が, 帰国後の日々の諸活動の中で活かされている。
- ・ 文化の違いやマイノリティの人の気持ちがよくわかるようになったこともよかった。たとえば, 困った時に助けてくれる友人をつくることを教えたりしている。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 現地に, 鳴門教育大学の先生が来てくださり, いっしょに現地の大学で学ぶ機会などを持った。



写真: デコレーションが好きな現地の人々の特徴を生かして数字やアルファベットを覚える工夫
【派遣中のボランティア活動】



写真: 遊びの中に数字を取り入れる数を数えながらうんていを進む児童
【派遣中のボランティア活動】



写真: コロニア・ワークショップ (公開クラス)
【派遣中のボランティア活動】



写真: ポンペイ初の幼稚園の公開授業
【派遣中のボランティア活動】

【表 9-20(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:H.U.教諭(2/2)】
 (兵庫県芦屋市／芦屋市潮見幼稚園／マイクロネシア派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)幼稚園児にマイクロネシアの話(45分授業)を行った。子どもたちにとってマイクロネシアという国がとて身近に感じられるようになっている。(2)自分の好きな国旗を描き、運動会で飾った。この活動を通じ、さまざまな国の国旗が載っている絵本が大人気になり、さまざまな国を話をするようになる。(3)「ともだち賛歌」という歌の替え歌づくり(普段の生活の中で、国際色を活かして、身近なところから自然にグローバルなことへと視野が広がるように工夫)。

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ 貢献要因: (1)園長先生の理解が大きい。(2)派遣による自分自身の変化とも重なるが、長いスパンで物事を見られるようになったことや、総合的なプロデュース力も貢献要因となっている。

【提案・要望】

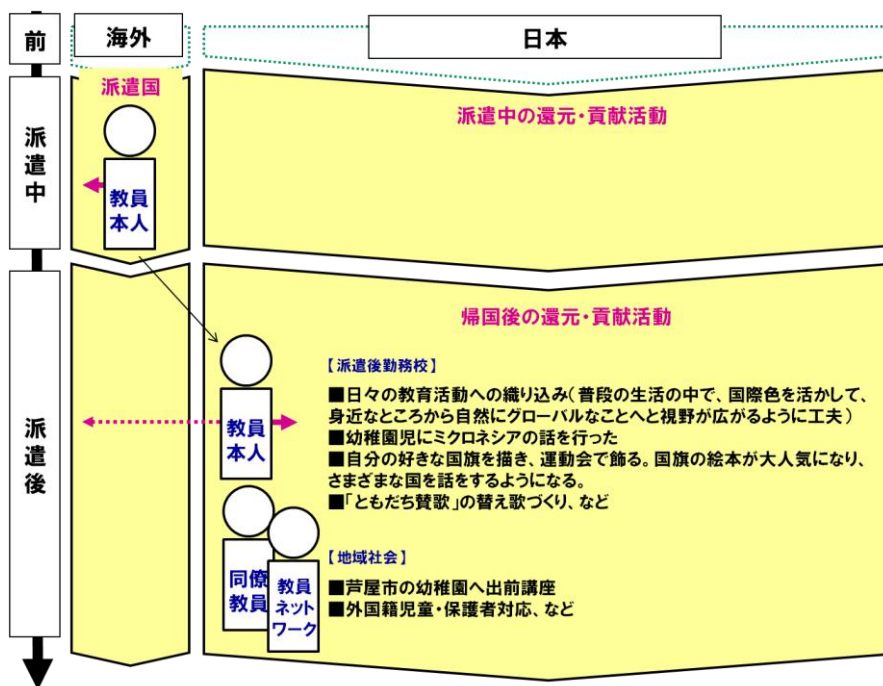
- ・ 幼稚園は組織が小さく、たいてい5,6人の先生でひとまとまりの組織となっていることが多い。そのため、現職派遣で一人が抜けると周囲に負担が大きくなり、組織的に、“出にくい”状況がある。フォロー体制が不可欠。
- ・ 帰国後に、体験を発表する場などがあるとよい。
- ・ 現在のところ、制度的に“保育園”は厚生労働省の管轄で、現職参加はできないが、ぜひ参加できるようにすべき。小さい子どものうちから国際教育の土壌を準備することができるというメリットに加え、省縦割りの領域が横につながるチャンスにもなる。
- ・ 幼稚園は小学校と違って、毎日親が子どもを迎えに来る。そこで子どもを通じた親同士のつながりがひろがっていくため、幼児期にこそ現職派遣による還元がとて大きな拡大の可能性を有している



写真:マイクロネシアについての授業風景
 【帰国後の還元・貢献活動】



写真:クラスで大人気の国旗かるたや国旗の絵本
 【帰国後の還元・貢献活動】



【H.U.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-21: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: H.O. 教諭 (1/2)】
 (兵庫県たつの市/たつの市立新宮中学校/マラウイ・パキスタン派遣)

【概要】

- 経験教員: H.O. 教諭
- 派遣国: マラウイ (平成 6 年度 1 次隊) JOCV
 パキスタン (平成 18 年度 2 次隊) SV
- 職種: 理数科教師 (JOCV), 理科教育 (SV)
- 還元・貢献活動キーワード: 「マラウイだより」,
 「ラホールだより」の送付, 道德教育, ALT との連
 携授業, 生徒指導, 出前授業, 学級通信, 人権
 学習, 国際理解教育, 理科の実験公開授業
- 教育実践キーワード: 命の大切さ, 自然との接
 点, 人権学習, 生物教材の収集と研究, ルール
 の根拠と自己選択, 実験教材・教具の開発



写真: マラウイでの授業風景
 【派遣中のボランティア活動】

【参加動機】

- ・ 日本の教育そのものを海外から見つめなおしたくな
 ことが直接的動機。
- ・ 大学の同期が JICA 職員であり, 派遣経験のある友人
 がいたため, JOCV についてはよく知っていた。

【制度認識と対応】

- ・ 友人からの情報で制度を知り参加希望を伝えたが, 制
 度についてはだれも知らなかった。合格通知が来た後
 に同僚に話したが, 特別反応はなかった。派遣時期と
 しては, 3 年生を卒業させるタイミングでちょうどよかつ
 た。

【派遣中活動内容】

- ・ マラウイ派遣時: (1) 理科教師として授業を行った。1 ク
 ラス 5 冊しか教科書がなく, 教師は教科書の要約を黒
 板に書いて, 生徒がそれを板書するというのが既存の
 授業スタイルだった。(2) 「マラウイ理数科教師部会」で
 は, マラウイ国内における理数科教師間の情報交換,
 研修, 研究授業会などを行った。また, 300 万円の資金
 援助が得られ, 現地に校舎もたてた。
- ・ パキスタン派遣時: (1) 小学生の理科実験の公開授業
 (研究授業会)。現地の大学の先生のプライドを傷つけ
 ない形で, 実験を取り入れた授業実践に取り組んだ。
 (2) 「理科教育部会」をつくり, 学習指導案に基づいた
 理科の公開研究授業を実施。(3) 理科実験のための教
 材開発を行った。この内容が認められ, 製本された。
 (4) 理科実験 HP を開設した。

【派遣教員自身の変化】

- ・ マラウイ派遣を通じて: (1) 時間を守り集団として行動
 できる日本人は, そのような“教えを受けてきているか
 ら”なのだということに気づき, 日本の教育制度を実感し
 た。(2) 今日の日本は自然との接点が少なく, 不安を感
 じるようになった。
- ・ パキスタン派遣を通じて: インターネットの普及によつて
 情報が豊富に入ってくるようになったが, その情報が実
 は偏ったものであることに気が付いた。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ マラウイ派遣時: 現地の異文化体験や活動の様子など
 をつづった「マラウイだより」を書き, プリントして在籍校
 (龍野西中学校) に郵送していた。滞在中の原稿は総
 数 120 枚。最終的には 40 部プリントし, 40 通を郵送。
- ・ パキスタン派遣時: 「ラホールだより」を作成し, 定期的
 に日本に送付していた。



写真: マラウイからのニュースレター「マラウイだより」
 【派遣中の還元・貢献活動】

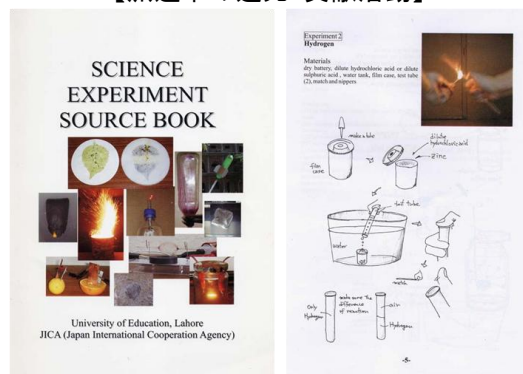


写真: パキスタン理科実験教材の開発
 【派遣中のボランティア活動】



写真: パキスタン・JOCV が活動する養護学校での
 サイエンスショー
 【派遣中のボランティア活動】

【表 9-21(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:H.O.教諭(2/2)】
 (兵庫県たつの市/たつの市立新宮中学校/マラウイ・パキスタン派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- 学校(授業):マラウイからの帰国後:(1)選択授業で、鶏を殺めて食べるという授業を行い、命を食べている感覚や、食べ物への感謝の気持ちを取り戻すことを実践。(2)道徳授業で、テロ攻撃事件についてALTを巻き込んで、共に考える授業の実施。
 パキスタンからの帰国後:「サイエンス・ショー」という理科の実験公開授業を、ALTを巻き込んで実践(ALTの活躍の場づくり)。
- 学校(授業以外):生徒指導で、校内ルールの根拠について説明し、ルール遵守の自己決定の幅を提供。
- 学校外:(1)教員ではない人を多く巻き込んだ「出前授業」の実践を行っている。(2)時々JICAからの講演依頼を受けて、人権学習の講演を行ったり、イスラムの女性の話などをして異文化理解について講演。マラウイからの帰国後:「学級通信SANU」を発行。マラウイでの体験談をもとに、学校生活の中のルールについての考えやメッセージを書きつづり、毎週1回学級通信として配布。1年間の学級通信を1冊に。パキスタンからの帰国後:「第53次揖龍小・中学校教育研究会」、「食べる生物の選択授業、選択理科1年間の取組」、「第55次兵庫県教育研究集会」での研究報告。「生物教材の収集と研究」、など



写真:ALTと行うサイエンス・ショー
 【帰国後の還元・貢献活動】

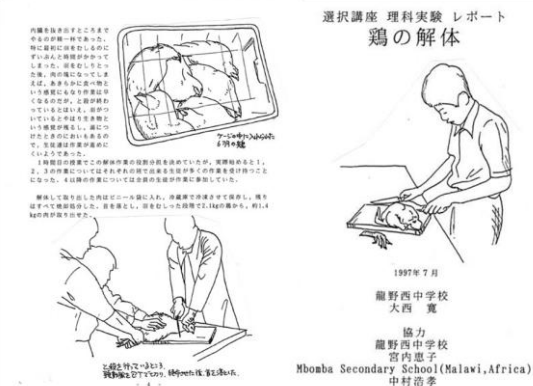


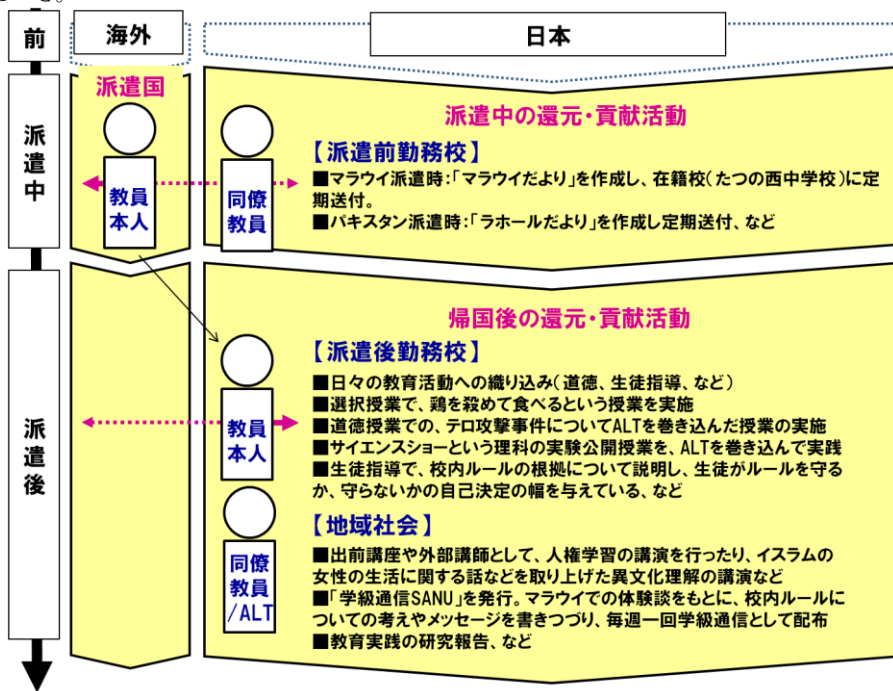
写真:鳥の解体レポートの作成
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- 阻害要因:理科教師として活躍したいが、実際には自分自身のエネルギーの9割が生徒指導に費やされ、本来の専門の理科教育に費やすことができない。
- 貢献要因:インターネットの力。情報交換できるシステムやネットワークを構築すること。

【提案・要望】

- この制度を活用して、とにかくもっとたくさん教師を海外に出してほしい。学校の教員は均質的。本来いろいろな個性の人々がいるべき。



【H.O.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-22:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:Y.K.教諭(1/2)】
 (東京都武蔵野市／武蔵野市立第三中学校／ハンガリー派遣)

【概要】

- 経験教員:Y.K.教諭
- 派遣国:ハンガリー(平成13年度2次隊)
- 職種:日本語教師
- 還元・貢献活動キーワード:日本語関連研究会合での報告・交流(派遣中),日本語指導,比較エッセイ
- 教育実践キーワード:日本語習得プロセスの体験に基づく日本での指導の幅の向上,日本語の面白さ,多様な言語習得に基づく独自の教授法の改善,「外からみた日本語」
- 備考:派遣後に国語教諭になる。

【参加動機】

- ・ 日本で日本語教師をしていたが,海外で教えて,自分の教授法がどれくらいの効果があるのかを試したくなった。そして,派遣後に日本で活かしたいと思った。
- ・ そのため,海外で教えるために日本語教師としての資格を取得し,さらに大学院に進学し専門的な知識も得たのちJOCV派遣。

【派遣中活動内容】

- ・ 配属先のデブレツェン大学の,語学コースの講師として1日約3コマ(1コマ90分)の日本語の授業を行った。授業は絵やカードを使ったりしながら,コミュニケーション的な直接法によって指導した。ハンガリー日本語教師会・ヨーロッパ日本語教師会共催の第7回「ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」にて,「日本語教育に於ける副詞の指導法について」を報告。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 茶道などの日本文化や日本料理に興味が出てきた。特に日本の食文化の豊かさを認識した。
- ・ 言葉が通じなくても何度も質問したり,意見を聞かせたり,くじけない勇気や強さが出てきた。細かいことにこだわらなくなり,幅が生まれた。
- ・ 帰国後に国語教員になったが,派遣中に日本語の面白さに気付いて,日本人にもっとこの面白さに気付いてもらいたいと思うようになった。
- ・ 派遣体験によって,外から見た日本語,母国語を日本語としない人々にとっての日本語習得のプロセスなどを体験することで,日本語の指導の幅が広がった。
- ・ 日本語に限らず,英語など,広く語学を習得するうえでの問題点に気づき,既存の一般的な教授法に依るのではなく,独自の改善や工夫を実践できること。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 大学院の恩師と連絡を取り,デブレツェン大学でのシンポジウム(ヨーロッパ日本語教育シンポジウム)の際に,先生が院生を連れてハンガリーにいられて交流。
- ・ 現地では日本語教育に関する教材が不足しているため,国際交流基金に申し込み,関連テキストを購入。
- ・ 日本文化紹介の日(イベント)の開催。(現地では文化的な関心が高く,日本文化も人気があり,日本文化紹介の日は代々JOCV日本語講師により開催されていたもの。)



写真:デブレツェン大学「日本の日」のイベントが新聞に掲載
 【派遣中のボランティア活動】

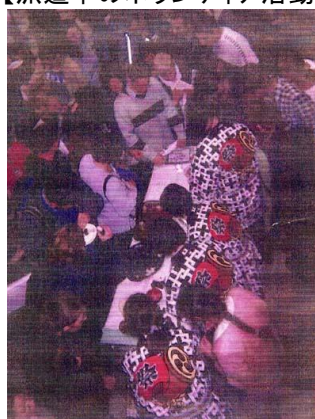


写真:写真:デブレツェン大学「日本の日」国際理解プログラムの実施
 【派遣中のボランティア活動】



写真:写真:デブレツェン大学「日本の日」(茶道の様子)【派遣中のボランティア活動】

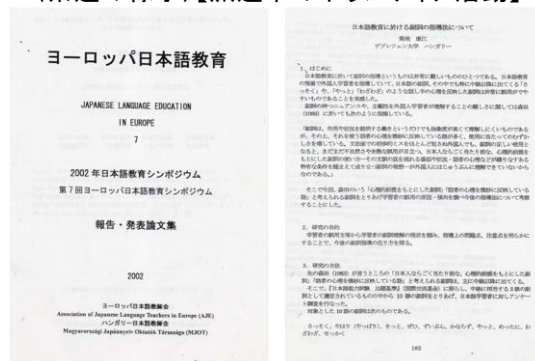


写真:「ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」での研究報告【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-22(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:Y.K.教諭(2/2)】
 (東京都武蔵野市／武蔵野市立第三中学校／ハンガリー派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業):国語の授業の中で、外国語と日本語の比較したエッセイを教材として扱う際、派遣経験で得た“外から見た日本語”について説明できたり、母国語を日本語としない人々にとっての日本語習得のプロセスなどから得たことを日本の授業に生かしたりしている。
- ・ 学校外:(1)JOCV 関東ネットワークなどへの積極的参加。(2)職場体験実習活動とおとしたコミュニケーション活動。(3)地域住民を巻き込んだクリスマス会の開催



写真:地域住民を巻き込んだクリスマス会の開催
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

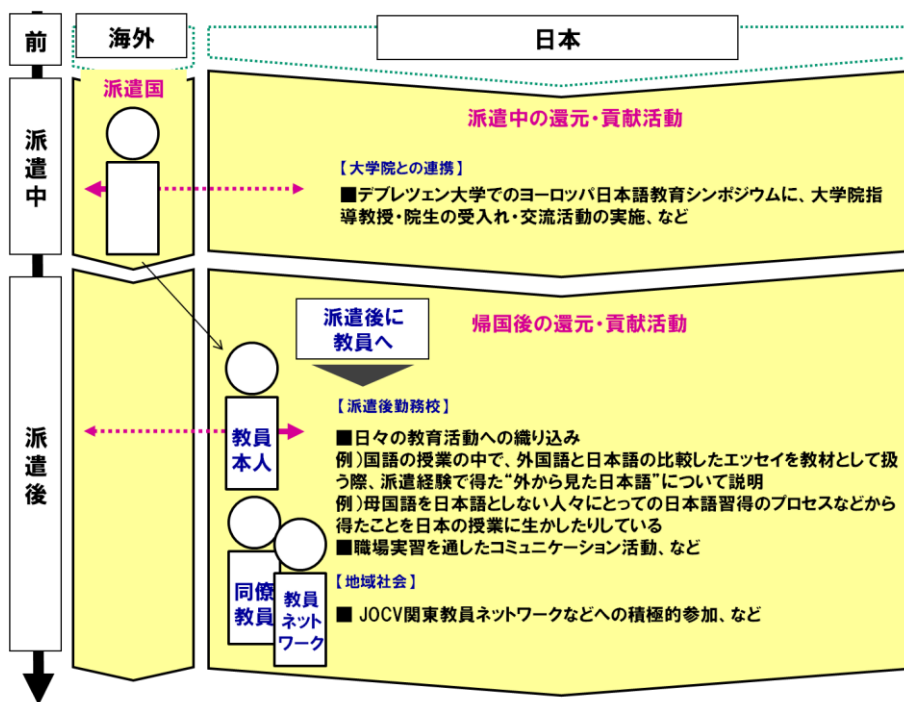
- ・ 阻害要因:(1)総合学習の時間など、派遣経験を活かす可能性が高い場も、学校全体でおおむねテーマ設定がなされるなど、自由な幅が少ない。(2)時間数がタイトすぎるため、生徒に時間を気にせずに発表させる機会を設けることができない。日本のカリキュラムそのものに余裕がない。(3)外国人の児童や、日本国籍でも日本語ができない子供たちへの日本語教育の機会が、日本の教育現場のカリキュラムに組み込まれていない。

【提案・要望】

- ・ 外国人の児童や、日本国籍でも日本語ができない子供たちへの日本語教育の機会の提供。対象者にあった教授法、カリキュラム、教材、それらを活かせる指導者が必要。本来言語は毎日、最低でも週 3 回はレッスンが必要。



写真:職場体験の実習活動を通じた
 コミュニケーション活動
 【帰国後の還元・貢献活動】



【Y.K.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-23:JOCV 海外教育経験教員の取組事例:A.N.教諭(1/2)】
 (東京都江戸川区／江戸川区立一之江第二小学校／ベトナム派遣)

【概要】

- 経験教員:A.N.教諭
- 派遣国:ベトナム(平成 17 年度 1 次隊)
- 職種:青少年活動
- 還元・貢献活動キーワード:「ベトナム通信」, ホイアンの祭りでの折り紙の共同壁画制作, 国際理解教育/開発教育, 平和教育, 共同壁画制作と国際交流, 英語教育
- 教育実践キーワード:日本の常識・世界の非常識, 教師が身につける生きる力, 図工・美術教育を通した道徳活動(もしも魔法がつかえたら)

【参加動機】

- ・ 中学教員になってから, タイ農村のワークキャンプへの参加がきっかけとなり, 異文化に興味をわく。その後, バングラデシュの識字教育に関するスタディ・ツアーに参加。JOCV 経験者と出会い, 協力隊に関心をもつ。

【制度認識と対応】

- ・ 制度に関する新聞記事を読む。教員経験 5 年目以上という都の要件を満たすべく, 6 年目に希望申請。職場の管理職は協力的ですぐに推薦書を書いてくれた。
- ・ 管理職の寛大な配慮で無事にベトナム派遣。ただ, 人事のため, 出発直前まで話さなかった。

【派遣中活動内容】

- ・ 「チルドレンズパレス」(ハノイ市人民委員会の「日本語クラブ」を担当し, 小中高校生を対象に日本文化の紹介や日本語指導にあたる。配属先では, カードゲームでひらがなを教えたり, 折り紙・鯉のぼりをつくったり, ひな祭りのイベントなど国際交流活動を推進。
- ・ 時間を見つけて, 「平和村」という枯葉剤の被害児が学ぶ施設や, 「SOS 村」という児童養護施設, 孤児院(菩提寺), 障害者訓練施設などにでかけ, 子どもたちと遊んだり, 歩行訓練の支援, 日本語を教えたりした。また, 「ドンロ 2 小学校」では数回, 図工の授業も行った。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 指示を受けたことだけやるのではなく, 自分から役に立てることを探すという習慣と積極性が身に付いた。
- ・ 日本の常識が必ずしも世界の常識ではなく, 必ずしも正しいものではないということを経験し, 寛容になった。
- ・ ベトナムで学んだことを, 体験にとどめておくのではなく, 日本の教育現場で活かしたいと思うようになった。
- ・ 材料を無駄にせず, 空き缶やペットボトルでも美しい作品ができることを意識的に実践できるようになった。
- ・ 日本の図工教育が, 発想力を伸ばす教育だと気づいた。
- ・ 途上国での体験を通じて生きる力が身に付いたことが, 教師として, “生きる力”を教えることにつながる。子どもたちは, 言葉よりも“後ろ姿”を見ることで育つ。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 「ベトナム通信」(全 11 号)を作成して前任校に送付, ベトナムでの生活や文化, 活動の様子などを伝えた。在籍校の同僚教員が学校廊下に張り出した。
- ・ 「ホイアンの祭り」では, ベトナムと日本の子ども(前任校の協力)が折った 2500 羽づつ折り紙で壁画を作成。
- ・ そのほか, JICA-net を通じ, 埼玉県草加中学校生徒と手紙・絵画交換や, 日本の高校生のツアー受け入れ。



写真:チルドレンズパレス(日本語クラブ)で日本文化を指導(書道)【派遣中のボランティア活動】



写真:枯葉剤の被害を受けた子どもたちの施設「平和村」で歌を歌う子どもたち【派遣中のボランティア活動】



写真:日本の前任校に送付した「ベトナム通信」【派遣中の還元・貢献活動】



写真:ベトナムと日本の子どもたちが折った折り紙で作した壁画【派遣中の還元・貢献活動】

【表 9-23(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:A.N.教諭(2/2)】
 (東京都江戸川区／江戸川区立一之江第二小学校／ベトナム派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)「アートマイルプロジェクト」において、ベトナム・日本両国の共同壁画制作による国際交流に取り組む(6年生図工時間)。(2)「アートマイルプロジェクト」において、フロリダの小学校と「平和」をテーマに壁画制作による国際的交流を実施。英語授業の一環としてビデオレターの交換を行う。英語圏とのプロジェクトを通して、英語教育や平和教育、国際理解教育への拡がりが見られた。(3)ベトナムで「もしも魔法が使えたら?」というテーマで描いた絵画を、日本での図工教材として使用。絵に表現されている家族の大切さや、貧しい人への配慮などを通して、「幸せ」や「豊かさ」の道徳的な学びにつなげている。
- ・ 学校(授業以外): 学校の同僚の連携によるアートマイルプロジェクトへの参画



写真:アートマイルプロジェクト
 日本とベトナム・壁画で国際交流(テーマは文化)
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

- ・ 貢献要因:「壁画制作による国際的交流」が評価されたため、在籍校では理解が得られるようになってきた。

【提案・要望】

- ・ 広報の内容に関する情報伝達が不十分な状況を改善してほしい。制度自体を知るためのきっかけが必要。
- ・ 人事の際に協力隊・国際理解教育の実践の経験を考慮してほしい。
- ・ 経験教員の需要と供給のマッチングが必要。国際理解教育など、経験教員の需要があるところもあるにもかかわらず、一方で、経験を生かしたいという希望がきき入れられない現状がある。

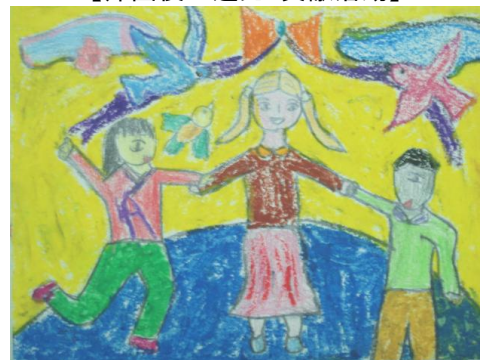
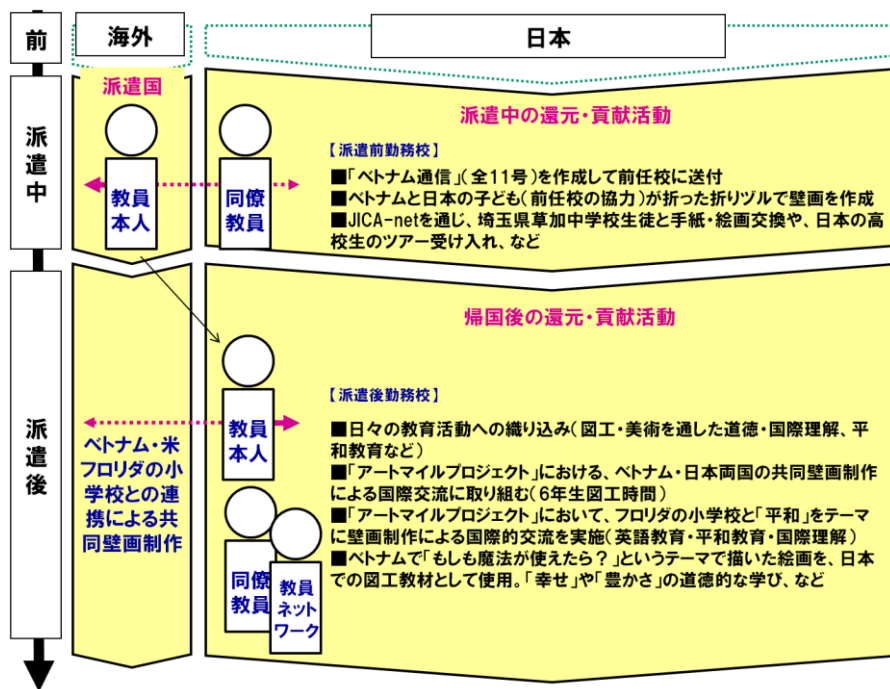


写真:日本の図工の授業教材
 「もしも魔法が使えたら?」、「世界中を楽しく、平和で戦争がないようにしたい」ベトナム SOS 村の 10 歳の女の子による絵画【帰国後の還元・貢献活動】



【A.N.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】

【表 9-24: JOCV 海外教育経験教員の取組事例: A.O.教諭(1/2)】
 (神奈川県相模原市／相模原市立上溝小学校／パラグアイ派遣)

【概要】

- 経験教員: A.O.教諭
- 派遣国: パラグアイ(平成 15 年度 1 次隊)
- 職種: 音楽教師
- 還元・貢献活動キーワード: 児童への手紙(壁新聞), 児童どうしの文通活動, 総合的学習の時間を活用した音楽祭「南米スペシャル」, 道徳の授業, 平和を願うミュージカルの脚本づくり, 外国語教育, アルパの演奏と国際理解教育
- 教育実践キーワード: 多様な価値観の尊重, 日本の教育指導方法のレベルの高さ, 経験の重さと自信, 世界と日本のつながり・かかわり, 自己表現の大切さ

【参加動機】

- ・ 大学院時代に旅行をしたときに, 海外に滞在したいと考えていた。その後, 電車の中で青年海外協力隊の広告を見つけ参加をしようと決意。教員 1 年目から海外派遣に興味を持っていたが, 教職の経験を積むために勤務を続け教員 8 年目にして参加。

【制度認識と対応】

- ・ 青年海外協力隊について自ら調べて見つけた。
- ・ 学校長, 教頭, 同僚の先生ともに協力的であった。

【派遣中活動内容】

- ・ 教員養成校, 幼稚園, 小学校, 中学校での指導
- ・ 町中の音楽教師への音楽教育法の伝授
- ・ 子どもたち(希望者)へのキーボードのレッスン
- ・ 大火災の被災者のため JICA の仲間たちと中心になってチャリティーコンサートの実施。企画書を地域の音楽団体に持ち込み地域を巻き込んだ。
- ・ 音楽教材(教科書)と CD の作成。

【派遣教員自身の変化】

- ・ 世界各国どこにいても「うれしいことはうれしい」ことや「音楽は言葉が違って通じる」ことを認識できた。
- ・ 他人が動かなくても自分の考えを押しつけないようにして, その人の考えを尊重するようになった。
- ・ 世界が身近に感じられ, つながりを感じられるようになった。
- ・ 形にならない財産(経験)からくる自信をもてるようになった。
- ・ 日本の教育は指導方法が確立されていると改めて良さを認識した。
- ・ 人間関係の点で考えが違う人の意見を考え, 認める事ができるようになった。

【派遣中の還元・貢献活動】

- ・ 前任校の同僚の先生に協力してもらい児童へ手紙を送っていた。生徒への手紙は壁新聞として廊下に掲示された。
- ・ 派遣国先での生徒と前任校の生徒との一対一での文通活動。
- ・ 前任校の児童会との連携による楽器の回収活動と寄付活動。



写真: 日本のリコーダーの寄付により喜ぶ子どもたち
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 派遣国先での多様な楽器の指導
 【派遣中のボランティア活動】



写真: 日本(前任校)とパラグアイの児童どうしの文通
 【派遣中の還元・貢献活動】



写真: 総合学習の時間での音楽演奏
 (パラグアイ・ハープ: アルパ)の演奏風景
 【帰国後の還元・貢献活動】

【表 9-24(つづき):JOCV 海外教育経験教員の取組事例:A.O.教諭(2/2)】
 (神奈川県相模原市/相模原市立上溝小学校/パラグアイ派遣)

【帰国後の還元・貢献活動】

- ・ 学校(授業): (1)総合的な学習の時間を利用し音楽祭「南米スペシャル」を企画。(2)「音楽を通じたメッセージ」として、総合的な学習の時間に「We are the world」を主題曲とした平和のためのミュージカル脚本作り。(3)道徳の時間の中で「国際理解教育」の授業展開。
- ・ 学校(授業以外): (1)担当クラスのあいさつを10カ国以上の言語にするなど、日常での外国語の導入。(2)朝会などでのパラグアイ・ハーブ(アルパ)演奏。(3)学校職員へのパラグアイの文化と教育事情の紹介。
- ・ 学校外: (1)教員研究会での発表。(2)政党本部での現職隊員派遣の実践報告。(3)筑波大付属小との連携による帰国後教員としての教育実践活動の展開。(4)教育関連雑誌への寄稿。



写真:国際理解教育の授業風景
 (ニヤンドウティドレスを着た A.O.教諭)
 【帰国後の還元・貢献活動】

【還元・貢献活動における阻害・貢献要因】

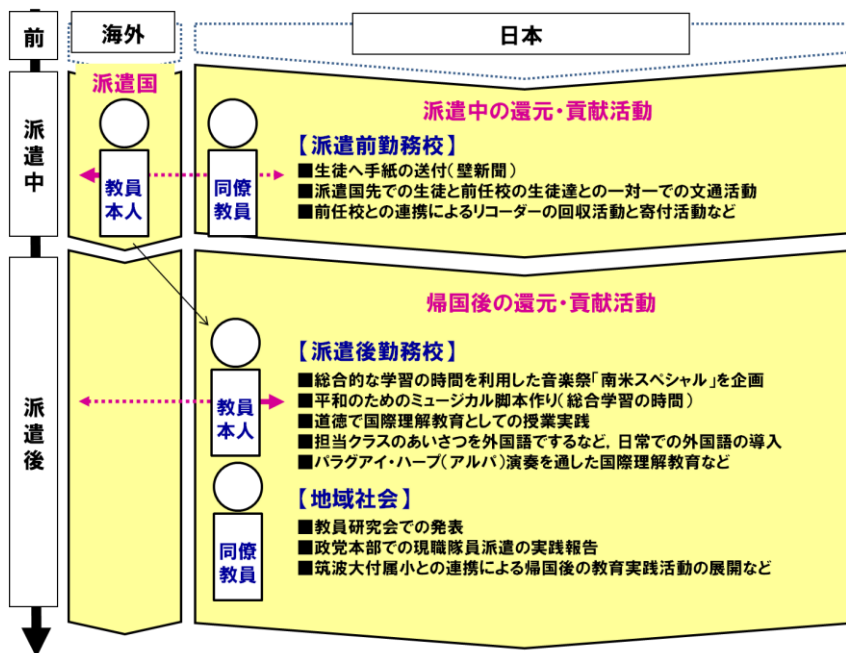
- ・ 阻害要因: (1)忙しい教育現場。(帰国当初はどこまで自分の経験をアピールして良いのか具体的に分からなかった) (2)時間調整の難しさ。(体験を他校にも伝えたいと考えたが、授業があるときには出張しづらいことや時数の都合で時間がとれないという現状がある)
- ・ 貢献要因: (1)校長など学校関係者の理解。(経験を生かした朝会での紹介や授業を展開することができた) (3)人事的配慮。(総合的な学習の主任や外国語教育の主任、国際理解教育の主任になり、他の教員に経験を広げる機会を持ちやすかった)

【提案・要望】

- ・ 他国籍の生徒が多い学校への人事的配慮。
- ・ 学校全体で国際協力の授業ができる場と雰囲気作り。
- ・ 国際的視野を持った授業の推進。



写真:音楽祭「南米スペシャル」の発表風景
 【帰国後の還元・貢献活動】



【A.O.教諭による社会還元・貢献活動(概要)】